
消えた閃光

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた閃光

【Nコード】

N7243V

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

恵まれた才能に生き甲斐を見い出せず、愛する女性とのささやかな未来を夢見る一人の男。しかし、その女性は或る事故をきっかけに彼の許を去ってします。全てをなげうって彼女を探そうとする男だったが……

人生の一期一会を或る男の半生に重ねて書いてみました。

この小説は、自身のブログ記事に加筆・修正をして転載しております。

四方八方から浴びせられるフラッシュに、鍛冶千光は眩しそうに顔をしかめた。たくさんのライトに照らし出されるリングの中央で居心地が悪そうに目を伏せる。肩に掛けられた大きなタオルを頭から被ろうとするが、グローブをはめたままの手では上手く行かない。

「勝利者インタビューです。デビューから、たった九戦目で東洋太平洋バンタム級チャンピオンに輝いた鍛冶千光選手です。おめでとうございます」

「ありがとうございます」

館内スピーカを通して歓声にかき消されるほどの小さな声だった。

「ノックアウトタイムが一ラウンド一分四十秒、汗もかいてませんよね」

「体質です」

「しかし、凄い左でした。息も上がってませんね。目指すは当然、世界ですよ」

「会長にお任せしておりますので」

景気のよい言葉を引き出そうと意気込むインタビュアーとは対照的に、勝者であるはずの鍛冶の口調は、敗戦の弁を語るようだった。ポツリポツリと最小限の返事を返すのみ。意識を取り戻した元チャンピオンが祝福のハグを求めてきた時、やっと少し口の端を上げる程度の笑みで応じた。

「いやあ、しかし凄い試合でした」

「強いチャンピオンでした」

「今は、あなたがチャンピオンなんですよ。見て下さい、みなさん。新チャンピオンの顔はこんなにキレイです。相手のジャブ一つも、もらっていません。我々は今、正に天才ボクサーの誕生を目の当たりにしているのです」

カメラが寄り、鍛冶の顔のクローズアップを撮ろうとするほどに彼は俯き加減になる。そして、どう煽ろうとも謙虚な言葉を繰り返すだけの新チャンピオンに焦れ、インタビューは観客席にマイクを振った。歓声の上がるリングサイドには私設応援団が掲げる垂れ幕が見える。『世界を目指せ、今日は通過点だ』 小さな旗を作つて振り回す人々や手製のプラカードに応援のメッセージを掲げている人々も居た。

「運が良かったのです」
ヒートアップする会場に反して、鍛冶の声は消え入りそうになつて行く。

「すいませんね、こいつは口が重くつて。勿論、世界を狙わせますよ。うちのジムから初めての世界チャンピオンが生まれるんですからね」

所属ジムの会長である足立忍が、インタビューの持つマイクに手を添え、続きを引き取った。

「ほお、生まれるですか。断言されましたね。鍛冶選手、会長のお話しをお聞きになつていかがです？」

「そうなればいいですね」
笛吹けど鍛冶踊らず。無口であることは聞いていたが、予想以上の無反応ぶりに、インタビューは万策尽きたように表情になり、仕方なく足立にマイクを向けた。

「新人王トーナメントも全てノックアウト勝ちで、ここまで無敗百年に一人、二百年に一人の才能を言われてますが、そのところは如何でしょう」

「そう言われるボクサーが少なくなく、しかし、彼等がその期待に応えることが出来ないままにリングを去つて行くのが、日本のボクシング界の現状を物語っています。暫定王者もJBCの認定団体も増えてしまった。しかし、こいつは本物ですよ。日本人に珍しいスイッチヒッターです。カウンターも取りにくいでしょうし、何より、あの手数です。そんな気さえ起こらないでしょうね」

「チャンピオン、こちらにファイティングポーズを」

スポーツ誌のカメラマンのリクエストにも会釈を返すのみ。さつさとトレーナーにグローブを外させてしまつと、バンテージを巻いた手でフラッシュの逆光を遮るようにして客席を見回す。そして、目的の人物を見つけると軽く手を振つた。

この人は何故、私に大言壮語を吐かせたがるのだろうか。己が才能を見極める客観的判断力など私にはない。？練習は裏切らない？会長とトレーナーの言葉を信じ、愚直に反復練習を繰り返した結果がこうなっただけだ。先のことなど分かるはずがないではないか。調印式で、丁々発止のやり取りを繰り返すボクサー達の振舞いが不思議に覚えて仕方なかった。恐らく彼等と自分では、人間の種類からして異なっているのだろう。沈黙の中、鍛冶はそう考えていた。

「会長、もういいですか」

そう言つと、さつさとリングを降りてしまふ。控室に引き上げる通路では、多くの観客が彼の体に触れようと手を伸ばしてきた。未だの世界チャンピオンへの期待と勝利への賛美なのであるが、薄いガウン越しに叩かれるのは、決して気分の良いものではない。通路の途中でリングから手を振つた女性に小声で囁く。

「勝つたよ、後でまた」

「うん、おめでとう」

瞳を潤ませた高木美穂子が頷く。試合開始直後から、握りしめていたのだろう。淡いパープルのハンカチがくしゃくしゃになつていた。

「しかし、お前の無口は直らん。リップサービスをしろとは言わないが、もう少し愛想を良くしたらどうだ。世界を獲れば、報道陣の数も、もつと増えるんだぞ」

「すみません」

詫びの言葉以外、言い訳すら口にしようとしなない鍛冶に会長は嘆息を漏らす。

「しかし、良かった。お前が負けるなんてことは、考えてもいなかったが、勝負は時の運という言葉もあるからな」

「皆さんのお陰です。シャワーをいいですか？」

勝利の美酒に酔いしれることもなく、さっさと帰り支度を始めようとする鍛冶に、足立とトレーナーの藤田は、やれやれといった表情で顔を見合わせた。

呆気なく終わってしまったタイトルマッチの放映時間を埋めるため、実況席では元世界チャンピオンの解説者が試合を振り返っており、その様子が控室のテレビからも流れていた。

「あれはもう、天性ですね。得意のパンチを捻じ込めるよう、相手がガードを空けてくれるとは限りません。双方ともにプロなんですから。しかし、その少ないチャンスを見つけた途端、スイツチして大砲を放つ。真似しようたって、出来ることはありません。そして、あの左のダブル、下かと思えば上、上かと思えば下と来る。避けようがありません。今までの日本人ボクサーには居なかったタイプです。彼に限っては、慢心まんしんも驕りおこもないようですね。ルーベン・オリバレスの強打とリカルド・ロペスの盤石ばんせきさを兼ね備えているといっても過言ではないでしょう」

「滅多に賞賛を口にしないあの人ですら、手放してお前を褒めているぞ。次は世界だ。俺に任せておけ。長期政権も夢ではないぞ」

普段着に着替え、控室を出ようとする鍛冶を足立が引き留めた。強打か、私にそんなものがあるのだろうか。それがないからこそ、スピードと精度を上げると、藤田さんがうるさく言うのではないだろうか。

高校に入学してすぐ両親を交通事故で亡くした鍛冶は、まだ中学生だった弟のため、哀しみに浸る間もなく職探しに奔走ほんそうしていた。その彼の才能を惜しみ、復学させた上、卒業後の職まで与えてくれたのはボクシング部OBの足立だった。

インターハイ、国体と高校のメジャータイトルを総なめにした鍛

冶は、足立の期待に充分応えたと言えよう。世話になった会長が喜ぶ姿を見るのは嬉しくもあつたが、鍛冶自身、それほどボクシングに情熱を燃やしている訳ではなかった。格闘技において重要な闘争心を持ち合わせない私が、この世界で通用するのだろうか。ぬるいシャワーを浴びている最中も、鍛冶はそんなことを考えていた。しかし、卓越したボディバランスがスイッチをごく自然に身に着けさせ、いついかなる時も冷静で居られる精神力が、練習の成果を存分に発揮させる。更には、無口が故に、どんな挑発にも乗らず淡々と自分のスタイルを貫くことで対戦者にプレッシャーを与える。稀代の名ボクサーとなる資質は充分に備えていた。

「お先に失礼します」

小さな声で暇を告げると、美穂子を待たせている喫茶店へと走った。

『これぞ千光（閃光）！』

スポーツ誌の一面を鍛冶の名前をもじったキャプションが飾る。

節約のため、新聞は取っていないかったので、わざわざ美穂子が駅まで買いに走ったものだった。プロ野球のオフシーズンとは言え、日本ではマイナースポーツ扱いをされるボクシングの記事、それも世界戦でもない試合が取り沙汰されるのは珍しいことだった。それほどまでに、彼への期待は大きかったのだろう。

「凄いわね、でも私には、ここに居る物静かなあなたと、この写真の人が同一人物だとは、とても思えないわ」

不鮮明な写真ではあったが、集中してパンチを繰り出す鍛冶の顔には、普段の彼からは想像もつかない厳しさがあつた。それを指差して微笑む美穂子を見つめる。片方だけに出来るえくぼが、鍛冶は愛おしくてたまらなかった。

「他にニュースがないんだろう。私はこんな怖い顔をして試合をしているのかな」

不本意そうに呟く鍛冶を気遣うように、美穂子は話題を変えた。

「それにしても、あのアナウンサーの人は気の毒だったわ。だって、あなただったら工場で働いてる時と全く同じで、全然喋らないんですもの。鍛冶居たのか？　って、よくからかわれてたでしょう」

ボクシングそのものより、弁が立ち、パフォーマン스에秀でた選手をバラエティ番組に引っ張り出したがるテレビ局などマスコミ側にも問題はあつた。露出が増え知名度が上がる一方、カメラ映えのしない地道なトレーニングは疎かになる。そして、周囲にちやほやされる事に慣れてしまった彼等は凋落への坂道を転げ落ちて行く。自分はタレントではない。彼等の様な受け答えを期待されても困る。ボクシングを生活の手段としか考えていなかった鍛冶は、専門誌の取材をも断り続けていた。

「口は災いの元だよ。それに、うちに居れば私の分まで、君が喋ってくれる」

「ひどーい、私がおしゃべりだって言いたいのに」

口を尖らすふりをするが、すぐまたえくぼを表出させる。明るく子供好きな美穂子となら、ささやかでも幸せな家庭を築くことが出来るはずだ。

質素なアパートの一室で、鍛冶は彼女にしか見せない笑みを浮かべていた。

「そろそろ、出掛けないと遅刻だわ」

「私も行くよ。会長は休んでいいと言っていたが、一人では時間もつぶせない。部屋も狭くなっだし」

「もう、本当に無趣味なんだから。パチンコや映画に行こうとかは思わないの？」

集中力を養う目的もあつて、唯一の趣味としていたボトルシップは狭いアパートの部屋に所狭しと並べられている。美穂子にも、これ以上増えたら足の踏み場がなくなると言われていた。新しい作品に手を出すのは、完成したそれらを同僚か弟にでもあげてからにしようとして決まっていた。

「映画はビデオを借りて君と観た方が楽しい、パチンコ屋は空気が悪い」

そして、東洋太平洋チャンピオンになったと言えど、生活に安定も向上ももたらさないのが、日本のボクシング事情だった。唯一の臨時収入となるファイトマネーは、観戦チケットを売りさばくことで現金化される。口が重く、交友関係の狭い鍛冶にとって苦行とも言える自己PR兼営業であつた。そしてそこでも、美穂子に助けられる。そうまでしなくても、と腰の引ける鍛冶を説得して同窓会名簿から友人の電話番号を調べ上げ「あなた方の同窓生が、頑張っています。応援を宜しくお願いします」と、まるで当落ぎりぎりの候補者を抱える選挙事務所のようなことまでやってくれたのだっ

た。

何人もの世界チャンピオンを抱え、ジム経営を上手くコマースヤル戦略に乗せた都会の大手ならいざ知らず、地方の弱小ボクシングジムが収支バランスをとるのは難しい。会長の足立をして、父親から継いだ自動車整備工場の収益があつてこそ、ジムを潰さずにいられるようなものであつた。

一時期、ダイエットにボクササイズが有効であると雑誌に取り上げられ、若い女性会員が増えたこともあつたが、最新式のトレーニング機器やプール、ジャクジーまでもが完備された大手スポーツジムが地元に進出してくると、汗と松ヤニの臭い立ちこめる薄暗いジムに残ろうとする女性会員など一人も居なくなってしまった。ボクシング経験など、これっぽっちもないインストラクターが指導するクラスの軽薄さがもてはやされるのだから、ダイエットもジム通いもファッションとしかとらえられてないのである。

ようやく、うちのジムからも世界チャンピオンが生み出せる。ジムの認知度が上がれば、会員や練習生も増える。一気にプラスとまでは行かないまでも、整備工場への依存は減るはずだ。景気の停滞を理由に、何年も昇給を見送っている工場従業員にも、少しは楽をさせてやる事が出来るだろう。足立がそう目論んだとしても無理からぬことなのである。

そこにメカニックとして勤務する鍛冶と、事務員的美穂子の収入が人に自慢出来るようなものではなかったのも事実である。両親を亡くした彼にとって経済的バックアップは、どこからも期待できない。独立を夢見ようと、賃金労働者の彼が資金を蓄える頃には、老人になつてしまっているだろう。手早く資金を稼ぐために彼が出来ることはボクシングの世界チャンピオンになるしか途がなかつた。

親身に面倒をみてくれた足立への恩返しにもなる。世界奪取、そして長期政権。その期待に反することではあつたが資金さえ貯まれば、すぐにでも引退して美穂子との家庭を守って行きたい、鍛冶はそう強く願っていた。

そして美穂子は、自身を大きく見せるような言葉を一切口にしない鍛冶の誠実さに惹かれた。決して美人とはいえない彼女だったが、愛くるしい笑顔と、その明るさは職場の華であった。多くの同僚からの誘いを断り続け、鍛冶が必死の思いで気持を伝えてくれるのを二年間も待ったのである。

試合前ともなれば残業を免除され、さらには美穂子のハートまでも射止めた鍛冶をやっかむ先輩社員が居た。立ち技最強はキックボクシングだ、と挑発を続け、鍛冶との異種スパarringを足立に懇願し続けた。辟易した足立は仕方なく1ラウンド限定のスパarringを認めたのだが、意気揚々とリングに上がったその男が数秒ともたずにマットに沈められたことは言に俟たない。モーシヨンの大きな右回し蹴りをダッキングでかわした刹那、鍛冶の左フックが一閃した。遠い未来、彼に師事する少年が放ったそれと寸分たがわぬ角度とキレだった。

実力の接近　異種格闘技において難しい条件ではあるが、そういった者同士の対戦だったとすれば、結果は別のものになっていたのかも知れない。しかし、才能に恵まれ、地道なトレーニングを欠かさない鍛冶と、ちっぽけな功名心に囚われて自身の能力さえ計れなかった先輩社員との間には埋まることにならない大きな溝があったのだ。

「なんだ、休んでいいと言ったのに」

タイムカードを押す鍛冶の背中に咎めるような足立の声が届く。

「でも、疲れはありませんし、試合前、私が休むことで皆さんに迷惑をかけていました。少しでもその分を取り返しておきませんと」

「すみません。休むようには言ったのですが、カズ君たら聞かなくて」

足立の配慮を無駄にしてしまったことを美穂子が代わりに詫びる。
「いやあ、この職場から世界チャンピオンが出るなら、みんな喜

んで君の分まで残業するよ。観戦後、寄った飲み屋でも鍛冶君の話で持ち切りだったんだから。同僚の我々としても鼻が高い」

リングサイドで垂れ幕の端を掲げていた検査員の須藤も、未だ興奮冷めやらぬ様子だった。

「ありがとうございます」

新聞で、テレビでと多くの賛辞を受けるようになった鍛冶だが、どうしても慣れることなく照れ臭さばかりが先に立つ。そそくさとロッカールームに消えていった

止まない雨もあるのではないか　そう思いたくなるほど、この年の梅雨は長く雨量も多い。深いグレイの雲が七月の空を覆う。これが明ければ夏が到来するのは四季のある日本では当然のことなのだが、自動車のエンジンから発せられる熱と排気ガスとが、工場の中に一足早く真夏を呼びこんでいた。床にこぼれた冷却水からは、陽炎かげろうさえ立ち昇るうかとしている。

「橋本さん、それまだ受け入れが済んでないって須藤さんが言っていましたよ」

事務所のドアから顔を覗かせた美穂子の声が場内に響く。

「え、本当？　じゃあ、また書類だけ持っていてよ。車検ですよ」

「はい」

いつもこうなんだから橋本さんは、と心の中でばやきながら緑色にペイントされたコンクリートの床に美穂子が降り立つ。

入庫した車は、工場で作業する前にフロントマンなり検査員なりが顧客の要望を聞いた上で書類を確認し、車両詳細と依頼内容をカルテに書きこんでから工場へ乗り入れる手順となっていた。しかし、気の早い橋本は、検査標章に記された数字を見ると車検による入庫と勝手に解釈をし、早々とドライブオンリフトに乗り上げ、入庫検査を始めようとしていた。このようなことは度々《たびたび》あり、一度工場に入れた車両を再び駐車場に出す煩雑はんざつさを慮おもった美穂子おもんばかが、車内から書類を取り出して事務所へ差し戻すという役目を担になっていた。経理の仕事以外にも保険業務を受け持っており、山積したそれらを定時までに終えるのに苦労はしたが、昼休み以外にも工場で働く婚約者の傍に行けるという特典はある。そう考える美穂子のフットワークは軽やかだった。

通称？馬？と呼ばれるリジットトラックで持ち上げられた車の下に

もぐっていた鍛冶にも、その声は聞こえた。左隣に位置するリフトに来るのだな。きつといつものように私の足をポンポンと叩いて事務所に戻るのだろう。鍛冶は踏ん張るために曲げていた足を気持伸ばした。

「リフト上げまーす」の合図がないままに、静かな音でリフトのデッキが上昇を始めた。しかし、美穂子が来る様子はない。もしや……彼女を乗せたままリフトアップしたとすれば、気づいていない美穂子が落下することもあるのではないか。鍛冶は、急いで車の下から滑り出た。

彼の案じた通り、最高位まで上昇したりフトを見上げると、ドアを開け車内に上半身を預けたままの美穂子の姿がある。

「美穂子、動くなっ！」

その声に振り返ろうと、足を後方に進めた彼女の体が落下を始める。考えている余裕はなかった。美穂子を受け止めようと、両手を差しのべながら、鍛冶は体を跳躍ちようやくさせた。後頭部辺りに左手を差し入れ、勢い余ってX型のアーム部分に体をつつませる。五十キロに満たない美穂子とは言え、重力加速度のついた全身を受け止めるのは至難の業だ。間に合わなかった右手の数センチ先を美穂子の背中がすり抜け、コンクリート製の掘り下げ部分に鈍い音と共に打ちつけられた。

「どけっ！橋本。何ぼうつとしてんだ」

眼前で繰り広げられる光景に理解が及ばず、茫然と立ち尽くすだけの橋本を押しつけるようにメカニック達が駆け寄る。騒ぎに気付いた事務所からも数人が駆け出てきた。

「救急車だっ！早く119番を」

誰かが叫ぶ。

「大丈夫か、痛い所はないか？」

鍛冶の腕の中で、美穂子が微笑みを浮かべた。

「ごめんね、おつちょこちよいで。カズくんこそ怪我してない？」
私は大丈夫だ。そう鍛冶が答え終わる前に美穂子が意識を失った。

オイルのような染みが彼女の下半身を濡らしてゆく。

「あなたもひどい出血だ。一緒に乗って行きなさい」

夢なら覚めて欲しい。ストレッチャーに乗せられて救急車に運び込まれる彼女を心配げに見守る鍛冶が、救急隊員の言葉で現実引き戻される。指摘されるまで、自分の体に頓着とんちやくすることはなかった。抱きあげていた間には全く気付くことのなかった強烈な傷みが襲ってくる。リフトのアーム部分と美穂子の頭に挟まれる形になった左肘から下、作業衣がどす黒く染まっていた。損傷部位を見るために上げようとした腕は、彼の意志に反して動くことを拒否し、垂れさがったままだった。

「肘関節内骨折（とう骨頭骨折）ですね、外側側副靱帯にも損傷があります。カルテに記された名前で気付きました。ボクサーの鍛冶さんですよ。ご安心下さい。復帰には時間がかかると思いますが、手術は成功しました」

麻酔から目覚めた鍛冶に執刀医しつとういが説明を始める。左腕はギプスと包帯でぐるぐる巻きにされていた。

「私のことより、美穂子は　高木美穂子はどうなんですか」

一緒に話を聞く足立が初めて目にする鍛冶の感情に支配された姿だった。

「高木さんとの御関係は……婚約者さんですか。詳しくは担当医にお聞きください。頭を守られたのが良かったです。チャンピオンとなれば反射神経も尋常ではないようですね。命に別条はないと聞いています」

大きく安堵の息を吐く。全身麻酔だったせいか霞がかかったような思考だったが、まだ訊ねたいことはあった。

「彼女には逢えますか？」

「どうか、まだ麻酔が覚めてないかも知れないし、あなたにも二十四時間は安静にしてもらいたい。幸か不幸か、二人共暫くは

入院してもらわないといけない。焦らなくてもいつでも逢えますよ」
冗談を交えて逸る鍛冶を嗜める医師に、深刻な状況ではないのだ
な、と起こしていた上半身をようやくベッドに預けた。

鍛冶が口を閉じると、今度は足立が口を開く。訊きたくてジリジ
リしていた質問だったのだろう。

「先生、復帰にはどのぐらいかかるんでしょう」

「患者さんは若いですし治りは早いと思いますが、こちら焦り
は禁物です。埋め込んだ金具を抜くまでに一ヶ月、生活に支障のな
い程度には二カ月もあれば回復するでしょうが、ボクシングを再開
するには、リハビリでしっかりと伸屈の角度や可動域を戻す必要が
あります。三ヶ月はかかるでしょう」

都合四ヶ月か……落ちた筋力や試合勘を取り戻すにも時間を要す
ことだろう。しかし、腕を失くした訳ではない。多少、遠回りに
はなるが不幸中の幸いだったと思わねばならないな。鍛冶のセンス
までが錆びつくことはあるまい。足立は、自分にそう言い聞かせて
いた。

同じ頃、別の病室で目覚めた美穂子にも、医師からの説明があつ
た。地方出身の彼女に、付き添うべく身寄りはいない。

「骨盤骨折でした。出血量が多かったので心配したのですが、幸
い腎臓や消火器系動脈には損傷はありません。ただ……」

言いづらそうに言葉を切った四十前後の女医が、思い直したよう
に続ける。

「お気づきになってましたか？ 妊娠されていたようなのです。

お気の毒です。流産でした」

芽生えた命を自分の不注意で摘んでしまった……美穂子の目から
涙が溢れ出た。

四

「ごめんなさい。あたし、全然気付いてなかったの」

医師の許可がおりて美穂子を見舞うことが出来たのは入院二日目の夜だった。流産を聞かされた時は若干の動揺もあったが、美穂子の無事が鍛冶の最大の関心事であった。泣きじゃくる彼女の背中を固定されていない方の右手で軽く支える。

「大丈夫だよ、君さえ元気で居てくれたなら子供はまだ出来る。

私の怪我也腕だけで済んだのだからね」

通り一遍の言葉しか出てこない。冗談も軽口も咄嗟には思いつかない生真面目な鍛冶だった。

「カズくんの腕まで、そんなにしちゃったのね。あたし、どう償えばいいの？」

「君が悪い訳じゃないさ。それに、私がもう少し俊敏だったら子供も助けられたのかもしれない。自分を責めないでくれ。償いなんて必要はないよ」

少しでも美穂子の負担を軽くしようと精一杯の気の利いた文句を探す。

「そうだ、さつき会長から聞いたんだが労災が認められるそうだよ。お互い忙しすぎたのかも知れない。少しのんびりしよう。ただ、働いてもないのにお金がもらえるのは気が引けるな」

「そんな腕じゃあ、働こうたって無理じゃない。カズくんらしいわ」

ようやく美穂子の右頬にエクボが現れた。

受傷後一ヶ月で退院した鍛冶は、リハビリに通院しながら美穂子を見舞う日々を送っていた。全治二ヶ月と診断された彼女だったが、松葉杖なしで歩けるようになるまでに更に一ヶ月の期間を要した。しかし、美穂子の持つ生来の明るさは見舞いに訪れた同僚の失恋を

励まし、一人の部屋は寂しいと嘆く鍛冶を「普通の人なら怖くて立てないようなリングに独りで居るくせに」と叱咤しったする。交わされる会話だけで判断するなら、どちらが入院患者か分からないような、やり取りだった。

そして、美穂子の退院の日、担当医に挨拶に向かった二人に夢想だにしなかった事実が突きつけられる。

「八月にお見舞いにいらしたお母様には、既にお伝えしてあります。あなた方には退院の日を待ってお話するように言われまして……」

女医の表情は硬い。

「お気の毒ですが、美穂子さんがこの先、赤ちゃんを産める望みはなくなりました。割れた骨盤に卵巣が押し潰され……」

目の前が真っ暗になり、後半は耳に入らなかった。子供はまた作ればいい、自分だけを責めるな。鍛冶の優しい言葉に一度は薄れた哀しみが更なる衝撃を以て、美穂子に襲いかかる。鍛冶との幸福な家庭を夢見ていた美穂子にとって死刑宣告ともとれる医師の言葉だった。焦点の定まらない視線を宙に彷徨さまよわすのみで、否認の一言も発せられずにいた。傍らかたわに寄り添う鍛冶も口を真一文字に結んだまま立ち尽くすのみであった。

「何かの間違いでは」

一度、喉元を大きく動かした後、絞り出すような声で猶予ゆうよを手繰たぐりり寄せようとするが、医師の言葉には微かな希望すら見いだせなかった。

「残念です」

そう言っただけの彼の絶望のような視線から目を逸らすと、医師は思い直したかのように明るい声を出す。

「リハビリさえ順調に進めば、何の問題もなく日常生活が送れるようになります。お子さんがいなくても幸せな家庭を築いてらっしゃる方々は多く居られますよ」

人が受け入れることの出来る哀しみには許容域きょよういきといったものがある

るのだろう。それを越えた衝撃に美穂子は涙すら流せず^ずにいた。

五

「リハビリの成否を分けるのは、御本人の治ろうとする意思の力に拠るところ大きいのです。高木さんは、積極的に取り組んではおられないように思えます。事情は聞いております。女性にとって妊娠の望みが断たれたということは確かに重い事実です。しかし、このままでは無駄に時間を費やすのみとなり、結果的に高木さんにとっても好ましいことではありません。一度、心療内科にかかれては如何でしょう」

リハビリルームから出ようとすると、美穂子を担当する理学療法士に呼びとめられ、そう告げられた。鍛冶自身、彼女のそんな様子には気付いてなかった訳ではない。アパートの生活に戻ってから、塞ぎ込むことの多い美穂子だった。時が心身ともに癒してくれるだろうと樂觀していた部分もあったが、掛けるべき言葉に迷いもあった。退院時に言われた通り、子供がいなくても幸せな家庭は築ける。何度も美穂子にそう言おうとしたが、それが、封じ込めたい記憶を再び呼び起こしてしまうのではないかという躊躇いがあった。

見え透いた気休めでも、他愛のない冗談でもいい。自分にもう少し多くの言葉があれば美穂子の苦しみを和らげてあげられるのではないだろうか。鍛冶は、この時ほど自分の寡黙さを呪ったことはなかった。

普段観ないようなコメディ映画のビデオを借りてみたり、鍛冶が得意でない華やかな場所へも誘ってみた。一時的には笑顔を見せてもくれるのだが、幼稚園や学校のある通りを歩く時、痛みのあるはずの彼女が一層足早になることが、刻み込まれた哀しみの深さを物語っていた。

鍛冶の気遣いが美穂子に伝わらないはずはない。理解すればする程に懊悩も極まって行く。理性で気丈に振舞おうとしても、受容し難い現実がそれを圧倒する。出口の見えない迷路を彷徨うような感

覺に苦しんでいた。

「一度、会社に顔を出しておこうか」

気分転換にでもなればと切り出した鍛冶に、肯定とも否定ともとれる曖昧な笑みを向ける。どこに誘っても、こんな具合だった。半ば強制的に美穂子を連れ出し、彼女のりハビリを兼ねて二十分程度の道のりを歩く。歩行補助具がなくても歩けるようになっていた彼女だったが、何かの捌り所よじりどころにしていたかのように外出時には必ずアルミ製のそれを手にした。

「御心配をおかけしました。二人共火曜日に退院出来ました。まだ、思うように動かせない体でして、もう暫くご迷惑をおかけすることになると思いますが、先ずは経過報告に伺いました」

応接室へと進められるのを固持こじして、足立のデスクの前に並んで立つ。美穂子のデスクだった場所に見覚えのない女子社員が座る。美穂子の代わりを務めてつといるのだろうか。完治した美穂子に戻る場所はあるのだろうか。この上、仕事まで奪われたら、どうやって彼女を慰めればいいのかだろう。鍛冶は落ち着かない気持になった。

「腕はどうだ？」

「伸屈も可動域も70パーセントと言ったところでしょうか。日常生活には支障のないところまで回復しております。ロードワークだけでも思ったのですが、腕を振って痛みがあるうちは止めておけと先生に言われました。美穂子も完治間近です。休んだ分を取り返そうと、二人で頑張つてりハビリに励んでおります」

先ほど抱いた思いが、美穂子の復職を意識した言い方にさせる。

「そうか、まあ焦らず頑張ろう。なあに、お前のボクシングセンスまでは錆びやせんよ」

同僚に迷惑を詫びたいと言った美穂子を事務所に残し、鍛冶は工場へと向かった。

「おう、元気だったか。酷い目にあつたな」

「物静かでも、仕事は人一倍こなしてくれてたんだな。お前がい

なくなつてしか気付けないようじゃあ、工場長失格だ」

メカニック達が口ぐちに賭けてくる言葉に頷き、欠勤によって彼等へかけた負担を詫びる。場内を見回したが目的の人物は見当たらない。

「橋本さんは、お休みなのですか？ 毎日のように見舞いにきていただいたお礼と、退院の報告をしたかったのですが」

たちまちメカニック達の表情が曇った。

「橋本さんは辞めたよ」

「え？ どうしてですか」

「あの事故の責任を取ったんじゃないかな。何度、社長や工場長に言われても直らなかったせつかちが事故を招いたんだからな。合図もかけてなかったんだらう？ あの時」

「しかし……」

見舞いにくる毎に、申し訳ない、すまなかったと、大柄な体を精一杯ちぢこまらせて詫びる橋本だった。勿論、恨みもした。美穂子との将来設計を大幅に見直さねばなくなった原因を彼が作ったことは同僚達の言葉を借りるまでもない。

ただ、こうも考えた。確かに彼の行為が事故を招いたことに違いはなかったが、せつかちにも見える彼の気の早さは、作業の効率を第一に考え、引いては同僚メカニック達の残業を少しでも減らそうとする配慮に基づいてのことでもあった。二人とも命に別条はなかったのだ、橋本さんも忘れて下さい。腕の痛みが治まるにつれ、美穂子の回復が進むにつれ、恐縮しきりの橋本に、そう声を掛けることが多くなつていた鍛冶だった。

誰も橋本を庇^{かは}おうとしなかったのだらうか、慰安旅行に同伴した橋本の妻と二人の子供の顔を思い出し、鍛冶はもの悲しい気分になった。

「美穂子は？」

事務所に残ったはずの美穂子の姿がない。入院中も、アパートへ

戻ってから何度も見舞いに来てくれた、美穂子が一番懇意にしていた女子社員に訊ねた。

「痛みが出たから先に帰るって伝えて欲しいって。鍛冶さん、ちよつと」

まだ、一人で歩くのは不安だと言っていたはずだが……怪訝そうな顔をする鍛冶に、女子社員が小声になって給湯室に手招きをした。
「高木君を受け止めさえしなければ 今頃は世界タイトルの調印式だったはずなのにな。美穂子がまだ事務所に居たのに気付かなかった社長が、そう言ったの。美穂子にそれが聞こえちゃったのね。ごめんなさい、私のせいですって言うと、飛び出していったの」

「何てことを」

唇を噛みしめる。

「それも置いたままよ、まだ五分ぐらいしか経っていないわ。早く行って、見つけてあげて」

黙って頷くと、歩行補助具を掴んで事務所を走り出る。強く振る上げると痛みが走る左肘だったが構わず速度を上げる。ものの数十メートル走ったところで、公園の赤茶けた遊具あかちゃにもたれかかる美穂子を見つけた。

「探したよ」

聞き覚えのある足音と声に振り返った美穂子の顔は涙に濡れていた。鍛冶の胸に倒れ込むようにして縋りつくと、声を上げて泣き出した。

「ごめんね、ごめんね、あたしのせいで」

「君のせいじゃない」

翌日、風邪気味だから今日は休むと言った美穂子に、強くりハビリ行きを進めることはしなかった。足立とて、悪意があった訳でないだろう。私がもう少し俊敏だったら、いや、元よりボクシングなどしていなければ……見えない出口を求め、鍛冶の思考は堂々巡りぐるぐるを重ねていた。

「ただいま」

美穂子の返事はない。買い物にでも行ったのかな？ 土間でスニーカーを脱ぎながら部屋ちやぶだいの中央に視線を送った。冬は炬燵机こたつぐえとして、それ以外の季節は卓袱台代わりとしていたテーブルの上に封筒と銀色の鍵が置かれていた。

カズ君へ

黙って出て行く私を許して下さいとは言いません。私は、あなたのいいえ足立社長にとっても日本のボクシングファンにとっても大切な腕を傷つけてしまったのですから。

そして、かけがえのない命を奪い、二人の未来までも閉ざしてしまつたのです。とても、あなたに相応ふさわしい女だとは言えませんが、

この気持は以前から感じていたものです。控え目なあなたは苦手そうにしていたけれど、スポットライトを浴びる姿は、とても誇らしかった。そして、そんなカズ君を見る度に、こんな平凡な私と日本中が注目するあなたが釣り合うのかしらと不安にもなつたわ。でも、二人きりで居る時のあなたは、いつも優しい言葉と態度で、そんな不安を忘れさせてくれました。私も、それに応えようと精一杯の応援をして、いつの日か、あなたが負けることがあつても、私だけはずっとあなたの応援団で居よう。それなら誰にも負けないで居られると思うようになっていました。

でも、もうだめ。自信が持てなくなつてしまつたの。

十六歳でご両親を亡くしたカズ君ですもの、つましくも温かい家庭を望んでいたのでしょうか？ 私はそれを実現させる能力を失つてしまいました。とても悔しいし、哀しいです。

社長の言葉に、傷つかなかつたと言えは嘘になりますが、あれだけ期待し、楽しみにしていたあなたの成功を遅らせてしまつたのが、私だつたことは事実です。同様にあなたを応援していた私だ

もの、落胆もわかります。社長を責めないであげて下さい。

私のことは心配しないで。ちゃんとリハビリは続けます。一人で生きて行くなれば、体ぐらいは丈夫でないとやって行けないから。

リハビリの先生が、あんなに一生懸命になさってくれたのに、仕方なく体を動かすような態度で居た私は、優しくしてくれるあなたに甘えていたのだと思います。この旅立ちをいい機会にしようと思います。

どうか、探さないでください。カズ君のことだから、すぐにまた新聞やテレビを賑にぎわせてくれるでしょう。影ながら応援します。

美穂子

便箋びんせんを握りしめたまま、鍛冶は部屋から駆け出した。今朝、私が部屋を出た時に決めていたのだろうか。何故、気付いてやれなかったのか。走りながら、つぶさに周囲を見回しながら、そうやって自分自身を責め続けた。

怪我をする前の二人がよく行ったアミューズメントパーク、最寄りの駅、お気に入りだった公園、美穂子が立ち寄りそうな所を全て探しまわったが彼女は見つからなかった。汗だくになった体を道路わきのガードレールに預け、もう一度手紙を読み返す。

私は、美穂子との幸せのためにボクシングをしていたんだ。会長のためでも、自分の栄光のためでもない。彼女が居なくなつた今、もうボクシングを続ける理由はない。

鍛冶はグローブを置く決意をした。

六

世話になった旨を書いた短い手紙と、形式通りの辞表をポストに投函した。
世話になつた旨を書いた短い手紙と、形式通りの辞表をポストに投函した。

少しだが、蓄えはある。この腕ではすぐに職探しという訳にも行くまい。美穂子を探そう。ボクシングには何の未練もない。一つずつ割って、ガラス瓶と燃えるゴミとに分別したボトルシップが決意の表れであつた。

少ない家財道具は、弟が欲しいと言つたものだけを送り、残りは粗大ごみの業者に処分を任せて部屋を引き払つた。美穂子と一年半暮らしたアパートを通りから見上げる。鍛冶の脳裏に数々の思い出が蘇つた。

見つけ出すと言つても、探偵でもない鍛冶にそんな経験もなければ、その方法も分からない。高校までを郷里で過ごした美穂子が頼りそうな友人もこの街には居ないと聞かされていた。心当たりは全て回っていた。実家に電話を入れてみよう。公衆電話を見つけると手帳を開き？群馬実家？と書かれた番号をコールした。

数回の呼出音の後、若くはない声の女性が応答した。見舞いに来た時、挨拶を交わした彼女の母親だろう。

「鍛冶と申します。美穂子さんはそちらに居られますか」

「鍛冶さん？ ああ、会社の人かい。美穂子はそちらに居るんじゃないん？ こっちにはきねえんだいね」

方言は耳慣れなかったが、帰っていないことは分かった。

「ええ、まだ怪我也完全に治っていないのに出て行かれまして。もし、お帰りになつたら……」

そこまで話して、鍛冶自身の確たる連絡場所が決まっていなかったのに気付いた。手帳をめくり、弟の電話番号を告げる。

「バカげだいなあ、無茶ばあいしとると体ばつこすげに」

「はい、私もそれを心配しております。どうか、必ず連絡をいた

だけですように」

電話を切ると、すぐに弟を呼びだして、用件を告げる。

「分かった、それで兄ちゃんはどこに行くんだ？」

「心当たりを探してみようと思う。ポケットベルを買っよ。美穂子から連絡があったらすぐに知らせてくれ」

既に心当たりといえるものはなくなっていたが、その言葉を口にするので何かが見つかるのではないか、そんな希望に縋るしかない自分が情けなく思えた。

足立の会社には不義理をした手前、顔も出せず、美穂子と仲の良かった女子社員に数回、電話はしたが彼女にも連絡には入っていないようだった。新たに聞けた話と言えば、橋本が辞職ではなく、実質的には解雇といった形で辞めさせられたこと。あの事故が多くの人の人生を狂わせたのだと知り、やるせない気持ちになった。

実家を訪ね、教えられた学生時代の同級生宅も回ってみたが、何の手掛かりも得られないまま半年が過ぎていた。少なかった蓄えも心細くなってきた。

腕も完治したことだし、仕事を探そう。そしてまた金が貯まったら辞めてフルタイムで美穂子探しを始めよう。

諦めてはいなかった。鍛冶にとって、たった一人の心を許せる女性であった美穂子を諦めることは、人生を投げ出すにも等しい行為だと考えていた。

ボクシングを続けていれば、少なくともこちらの近況は伝わったのではなかったろうか。そんな後悔も何度となく頭を過ぎった。

『自動車整備士急募、待遇は応談　？名神自動車』

腕に覚えのあるものと言えば、ボクシングと車の整備ぐらいしかなかった鍛冶は、貼紙のあった中古外車ディーラーを訪ねた。

「専務、応募の方が来てます」

応対に出た中年の女性事務員が奥の事務所に声をかけると、背の

高い神経質そうな男がぬつと現れた。四十代後半ぐらいだろうか、広い額をした痩身の男は黒々とした髪をオールバックに撫で付け黒縁眼鏡をかけている。

「整備士さん？　そこへかけて」

進められるままにソファに腰を下ろす。

「私が専務の葛西です。ええと、履歴書はお持ちかな」

就職活動の経験のない鍛冶にとって、履歴書という単語は耳にしたことはあつたが、それが必ず必要なものだとの認識はなかった。上着のポケットから折りたたんだ住民登録票を出す。

「いえ、実は私、この近くに住んで居るのですが買い物に出た時に、あの貼紙が目にとまったもので、お話だけでも伺えないかと……住民票は持ってますが、履歴書が必要でしたら、改めて出直します」

受け取った住民票を眼鏡をずらして葛西が眺める。

「鍛冶千光君、二十三歳か、若いねえ。まあ、形式だけなんだけどね。実務経験はあるのかな」

「民間車検の工場で四年間勤めておりました。二級整備士の資格はガソリン、ディーゼルともに持っております」

「ほお、それは頼もしい。いや、うちに居た整備士が急に辞めてしまつてね。残ったのは三級資格しか持つてないんだ。監査に入られて認証を取り消されても困る。整備士手帳を持つてきてもらえばそれでいい。明日からでも来られるかい？」

やけにあつさりと採用を決めてしまうものだ。以前の勤務先より規模は小さいが、就職の面接というのはこんなに簡単なものなのだろうか。戸惑いを問い掛けに変える。

「はい、私は構いません。大変失礼な質問なのですが、専務さんの裁量だけで決められてよろしいのですか」

「うちの社長は亡くなつた先代の奥さんでね。喫茶店が本業なんだ。ここは私が取り仕切っている、心配は要らないよ。二カ月はアルバイト扱いだが、交通費は支給する。おっと、近くに住んでるな

ら交通費は要らないか」

「はい、走って十分の距離です」

「ははは、何も走る必要はない。必要なら社用車も貸す」

仕事を持てば、美穂子探しに充てられるのは休暇だけになるだろう。しかし、車が借りられるならバスや電車を乗り継ぐ手間はなくなる。今までより効率の良い捜査が出来るかも知れない。鍛冶に託しては願ってもない申し出だった。

捜査か　私は刑事か探偵にでもなったつもりか。彼等なら、既に美穂子を見つけ出しているのだろうか。しかし、その探偵まがいの半年が、鍛冶に人並みの会話と洞察力を身につけさせてもいた。

小さな中古車ディーラーなら、私の顔を知った誰かと逢うこともないだろう。贅沢とは縁のない暮らしの鍛冶にとって、マイカーとは言えないが自分専用の車を持つのは生まれて初めてのことだった。ここに決めよう、一〇二年働けば、美穂子探しの資金が出来るはずだ。

「朝は九時からだから、他の従業員には明日紹介しよう。じゃあ、そつゆうことで」

無言で考えを巡らす鍛冶を残し、葛西は席を立った。

七

「今日から働いてもらうことになった鍛冶千光君、二十三歳だ。若い。二級整備士の資格を持っている。三十八歳の山口君にも早く二級を取ってもらわんとな」

ツナギを着た小柄な男が、葛西の皮肉に苦い顔になった。

「こちらが営業主任の横井君、事務員の福田さんと高松さん、整備担当の山口君、そしてアルバイトの菅沼君だ。社長はたまにしかここには来ないからね。いらした時にでも紹介しよう。当座は山口君の指示で動いてもらおうか。仲良くやってくれたまえ」

「鍛冶です。どうぞ宜しくお願いします」

それぞれが簡単な自己紹介を添えて、顔合わせを終えた。隣の喫茶店から出前されたコーヒーを飲む事が、朝のミーティングにおけるルーティンとなつていゝらしい。そして、その喫茶店は、社長が経営する店ではないという。売上に協力しなくてもよいのだろうか。鍛冶は素朴な疑問を隣に座つた菅沼にぶつけてみた。同年輩か、少し上ぐらいか。ツナギは着ているが、メカニックではなく商品車を洗つたり磨いたり彼の担当だそうだ。

「ああ、あそこは遠いからね。それにどうせなら若い女の子が運んでくれたコーヒーの方がいいだろう。あつちはウエイトレスも高齢化が進んでいましたよね、横井さん」

菅沼は営業主任に水を向けた。値踏みするような視線を鍛冶に向けていた横井が、そうだなと短く同意を示した。

私なら、味を選ぶが。その感想は口にせず、菅沼に目で先を促す。これも半年間の美穂子探して身に着けたものだ。こちらが黙つていれば、話し好きな連中は、放つておいてもぺらぺらと喋り出す。手掛かりになる情報は得られなかったが、人間関係の機微きびや、それぞれの思惑が読みとれるようになっていた。

「アルバイトの身だが、国立大学を狙っている。今は妻の方が稼

ぎはあるが、それも私が卒業して大きな会社に入るか、国家公務員にでもなればすぐに逆転する」

入れてもいない大学や、数年後の自分の未来を明るいものと言い切る菅沼の言葉からは、妻に食わせてもらっている後ろめたさを感じられた。二十四歳か　どれだけ受験に失敗し続けているのだろう。学業に向いていないのではないだろうか、それを指摘しない妻は、どれだけ人間が出来ているのだろう。菅沼に関する情報と疑問を素早く頭に刻み込んだ。

「私の方が一つ年齢が上だから、鍛冶君と呼んでいいよな。今は同じアルバイトみたいなもんだし」

「ええ、構いません」

年齢や境遇で力関係を決めたがる姿勢も、見栄みえや虚飾きょしよくに拘こだわる人間であることを裏付けた。

ロッカールームでツナギに着替え、山口の指示を仰ぐ。三十八歳独身だと聞いていたが、その年齢よりかなり老けてみえた。

「二級か　俺も学科は受かっているんだ」

実技試験が通って初めて資格は授与される。しかも、二年の猶予期間しかなかったはずだ。山口がいつ学科試験を受けたのかは分かっていなかったが、彼の口ぶりから、それもとくに失効しているのだろうと判断した。人はどうしてこうも自分を価値ある人間だと思わせようとするのだろう。どれだけ背伸びしようと、人が手に出来るのは身の丈に見合ったものだけではないのだろうか。そう考える鍛冶にとって、彼等の言葉は不可解に思えた。

「車検は出来るよな？　持ち込みの経験はあるのかい」

「ええ、いわゆるマルチユウ新規で何度か。テスターをかけるところは決まっているのですか？」

「高村んとこで、やってる」

陸運局の西隣だな。頭の中で、高村テスター場とスレート壁に書かれた建物の場所を思い描いた。

「じゃあ、うちのやり方に慣れるまで外回りを頼もうか」

慣れるまでか 試用期間が済んで専務の言った通りの報酬がもらえるなら、永く居て一年だな。しかし、それは言わずにおこう。鍛冶本人が、いくら真面目に働こうと、短い雇用期間の人間に対する扱いは、足立の会社でも見てきていた。

「それと……まあ、いい。見てのお楽しみだ。驚くぞ」

言いかけた言葉を止め、山口がにやりと笑った。それが何を意味するのか、想像して期待や不安を抱くことも無意味だな。曖昧に頷いてお茶を濁した。

黒塗りの高級セダンが会社の正面に乗りつけられ、素早く運転席を降りた短く髪を刈り込んだ男が後ろのドアを開ける。ダブルのダークスーツに身を包んだ恰幅かっぶくのよい初老の紳士が降り立った。

客か？ スタッフの誰も気付かないのか、いらっしやいませの一言を誰も発しようとしなない。会社の関係者なのだろうか。車の方にちらつと目をやった山口が「早速だな」と、呟く。初老の紳士ショールームのドアをくぐり、運転手と思しき男は再び乗り込んだ車の向きを変えて駐車し直すと工場へと歩いてきた。

「景気はどうだい？」

「はあ、岸田さん。ボチボチですよ、ボチボチ」

顔見知りのようだった。かけた言葉の気やすさとは裏腹に岸田と呼ばれた男の目つきは鋭い。

「新人メカニツクの鍛冶君。岸田さんは、会長の運転手兼ボディガード、で、いいんですよね」

「まあな」

山口に紹介された男が気軽な調子で手を上げた。鍛冶は会釈を返しながら考えを巡らせる。会長？ この小さな会社にそんな役職があったのか。ショールームに入っていた男なのだろうか。そしてこの男の目つきとボディガードという言葉の意味は何なのだろう。そうこうしているうちに、高松と自己紹介した事務員鍛冶呼びに

来る。

「鍛冶さん、専務が呼びよ」

「おう、仕事の手を止めて悪いな。社長への紹介はまだだが、会長が先にいらしたから、紹介しておく。新藤会長だ」

初老の紳士が、接客用のソファにどしりと腰を下ろしていた。正面に立つて一礼をする。

「鍛冶です。宜しく願います」

顔を上げ、会長と呼ばれた男と目が合った瞬間、射すくめられるような視線の鋭さを感じた。鷹揚おつように笑ってはいるが、それが作られた表情であることが伺える。足立が興業屋との折衝せつしょうをする場所に同席した際、こんな目をした男達がよく周囲に居たのを思い出す。ヤクザか

「そうか、宜しく頼む。鍛冶？ どこかで見た顔だな」

「はい、よく言われます。しかし、私は会長を存じ上げません。きつと、どこにでも居るような顔なのでしょう」

新藤を間近で見た鍛冶にもそんな感覚はあったが、私設応援団を立ち上げてくれたボクシング部OBの大山康之に良く似た風貌と体格が、そんな錯覚を起こしたのではないかと判断した。何より、以前の自分を知られることが面倒に思われていた。

「まあ、いい。仕事に戻ってくれ」

「はい、失礼します」

工場に戻った鍛冶に、山口がにやにや笑いを貼り付かせた顔で話しかけてきた。菅沼は、岸田と共に黒塗りのセダンに毛ばたきをかけている。

「驚いたろう」

「はっ？ 何がでしょう」

「会長だよ、有名人だぞ。よく週刊誌にも写真が載っている」

「あまり、雑誌は読まないもので」

山口が大袈裟に両手を上げて、呆れる仕草をする。

「新藤太、坂口組傘下ではナンバーワンの新藤組の組長じゃないか。知らないのか？」

それで、運転手兼ボディガードがつく訳か　鍛冶は岸田の目つきにも、新藤の視線の鋭さにも得心がいった。

「会長が、ばばあ……社長のスポンサー兼後見人って訳だ。外車の商売には必要なんだよ、こつう後ろ盾^{うしろだて}が」

なるほど、そういう図式か。ばばあ、と山口が呼んだ社長とはまだ面識がなかったが、一従業員がそう呼ぶ人間の人望は想像がついた。やはり永く居るべき会社ではないな、鍛冶はそう考えていた。

「驚きました」

押しつけがましい解説に、儀礼的に言葉を返す。

「なんだ、ちつとも驚いた顔をしていないな」

もともと、雄弁とはいえず感情表現も豊かではなかったが、美穂子の搜索において、正確な情報の収集には気持を顔に出さないようにすることが大切だと学んでもいた。そして、ヤクザの世界に何の関心も持たない鍛冶にとって、それが驚きを示すようなことでもなかったのである。

八

社員待遇を受けられるようになって八カ月。質素な生活を送る鍛冶の蓄えは順調に数字を伸ばしていた。

潤沢じゆんたくとは言えないが、これでまた半年ぐらいはフルタイムで美穂子探しが出来る。辞職する時に社用車が代車を安く譲ってもらえないだろうか。交通の便が悪い隣県にも足を伸ばしてみたいと思っていた彼にとって是非とも欲しいと思っていたのが自家用車だった。

ここで過ごした期間、鍛冶は多くのことを学んだ。そして、やはり自分の居られる会社ではないなといった再確認を繰り返す毎日だった。

予想した通り、山口の整備技術はお粗末なものだった。故障の原因をしつかりと究明もせず、すぐに専門店に電話を掛けて助言を仰ぎ、それを頼りに部品をとつかえひつかえしながら故障の完治を祈る。そういった博打のような手法は効率が悪く、それが彼の整備士としての成長の妨げになっていることにも気付いていない様子だった。

分解整備の記録簿は書かない。ないのだから、運輸局から義務づけられた保管もしない。顧客データも事務員が大学ノートに手書きしたものだけで、カルテすら作られていない。これで、よく整備工場として機能するものだと感心 いや呆れかえっていた。

何度となく、業務形態の見直しも提案したが「これが、このやり方だ」と山口は、改善を拒否した。生産性の低い仕事ぶりに見かねて引き取った仕事もあった。それに対して礼の一つも口にするでなく、顧客には「苦劳しましたが、私だから直せました」と、自身の手柄を主張していた。

そして、鍛冶が目を疑ったのは、専務の葛西以下、アルバイトの菅沼までもが熱中していた競馬である。業務中でも平気で出入りのノミヤから馬券を買い（正確には数字を告げるだけであつたが）、中継のある日には仕事そっちのけでテレビにかじりついてたのであ

る。テレビを観ないのなら、場外馬券を買ってこいとの命令には断固として拒否した。それが原因で険悪にもなりかけたが、雇用される側の義務を果たさない行為は、鍛冶の価値観において到底受け入れられないことだったのだ。

仕事に情熱を燃やすことのない輩やからの興味は当然の如く、それ以外に向く。菅沼と山口は、事務員の高松に対して恋の鞘当さやあてを演じていた。「旦那が構ってくれない」と公言する彼女も彼女だったが、妻に食わせてもらっていた菅沼の倫理観の喪失そうしつは醜く、そして、能力のなさを棚に上げ、待遇の文句ばかりしか口にしなかった山口が、高松に言い寄る時にだけ浮かべる卑屈な笑みは哀れにすら感じた。

営業主任たる横井の仕事ぶりは、メカニックの現場からは分らなかったが？溶かす？という言葉をよく耳にした。出入りのブローカーと組んで下取り車の横流しをする行為を指す言葉らしい。

そんなスタッフによって構成される会社の業績が芳かんばしいものである訳がない。致命的だったのは、新藤の組の構成員達だった。夏ともなれば、半裸で無駄に大きな車体を持つアメリカ製の車を洗いに来る。不特定多数の来客があつてこそ成立する商売であつた。全身を色とりどりに染め上げた連中が闊歩かつぽする店になど、堅気の客が足を運ぼうとしないのは道理である。永くいるつもりはないが、永くはもたない会社でもあるのかも知れない。私の心配することではないか。浮かんだ懸念けねんは頭の片隅に追いやつた。

意外なことに会長の運転手兼ボデイガードを務める岸田には何故だか可愛がられた。誘われるまま、幾度か小さな定食屋で食事を共にしたこともある。華やかな席は苦手だし、金もないから高級クラブには誘ってやれない。悪いな、と話す岸田の言葉から、彼が自分同様、寡黙で虚飾と縁のない人間だということを感じ取っていた。本家のある関西から修業に来ており、いずれは戻るのだと語つた彼と、今の場所に腰を落着かせるつもりのない鍛冶の境遇も似ていたことに相通あいつうずるものがあつたのだろう。

「困つたことがあつたら何でも言つてこいよ。貧乏だから金は貸

してやれんがな」

そう言つて笑う岸田の顔は幼い頃からヤクザになるべくして生まれてきた人間ではないことを物語っていた。

「私は臆病な人間ですから岸田さんの世話になるような目には合いません」

「臆病だと？ 俺や会長の素状すじょうを知った上で、媚びも怯えも表さないお前がか？ まあいい、そうヤクザを嫌うな。若いお前にはまだ分からんだろうが、法律でも警察でもなんともならんことが我々が出張でばつて片付くこともあるんだ。覚えておくといい」

「はい」

岸田が何を感じ取ったのは分からなかったが、頷くだけの返事に留める。間違つても、そちらの世界にスカウトされる訳には行かなかった。

或る日のことだった。ミーティングのため事務所に顔を出す、険しい顔で額を寄せて話す新藤と社長、そして横井の姿があった。

「珍しいですね、会長がこんな朝早くいらしているなんて。何があつたんです？」

先代の頃から社に籍を置き、新藤や社長の覚えもよい事務員の福田に抑えた声で訪ねる。

「葛西専務が、会社のお金を横領して逃げたんだそうよ。二千万円ですって」

いつかはこんな日が来るのではないかと感じていた鍛冶は驚きこそしなかったが、心の中で舌打ちをした。今月はタダ働きになるかも知れないと。

「葛西のマンションには、母親と女房が残っている。戻ってくるつもりかも知れん。うちの若いのと二人一組になつて昼夜交代でマンションを見張れ」

全従業員と、確立されたシノギを持たない構成員が数名、臨時の作戦会議室となつたシヨールームに雁首がんくびを揃えていた。新藤から業

務とは何の関係もない指示が出される。ブラインドは下ろされ、工場のシャッターも上げられないままだった。菅沼と山口は落ち着きなく視線を泳がせている。彼等にアバンチュールを夢見させた高松は、大火傷を負いそんな危険を察知したのか、早々と社を辞めた。

「私達もですか？」

不安に打ちひしがれ、蚊の鳴くような声で、抗議の声を上げたのは菅沼だった。彼に借金取りまがいの張り込みなど経験のあるはずはない。そもそも世の中の仕組みそのものに疎い男だったからこそ、未だに夢を追いつめることが出来ていたのだろう。

「隣近所に物を訪ねるのに、うちの若い連中では怯えて話も聞けないだろう。だからお前らにも張りつかせるんだ」

怒声が返ってくることは予測しなかったのだろうか、そういった意味では世間知らずも役には立った

「私は、夜は家に居ませんと。妻が仕事に出るもので」

「だったら、お前は昼番だ。お前らにも会社の利益を食い潰した自覚はあるだろう。たった二千万だぞ、それでこんな騒ぎにしなければならんのは、会社の体力がなかったからだ。お前らの責任でもある。どうする？ お前が葛西の代わりに湾に沈むか」

声を荒げることもなく静かに、いや、静かだからこそ現実味を持つて脆弱な菅沼の肝を掬じり上げる。彼も地元の港湾事業を新藤組が一手に担っていることは知っていた。

「山口、お前が夜だ。小田と組め。横井は岸田と、明け方だ」

「へい」

その頃には構成員達の役割に多少なりとも理解を深めていた鍛冶だった。いわゆる特攻隊と呼ばれる物騒な連中のなかでも特に凶暴な様相の小田が低い声で答える。山口はうなだれたままの首を小さく縦に振った。

「鍛冶」

「はい」

仕方ない。専務が見つかるまではお礼奉公だれいほうこうと思つて耐えよう。
私は誰と組むのだらう。張り番の岸田の代わりに運転手をさせられるのだけは勘弁してもらいたいものだ。鍛冶は半ば諦めの境地になつていた。

「お前は、いい」

「は？」

「お前の事情は足立から聞いている。あいつとは幼馴染おさなじみでな。もう、ここは終わりだ。本来の努めに戻れ、俺としてはお前が世界を獲るところが見たかったのだがな」

その場の全員の視線が鍛冶に集まつた。

「これを見て思い出したよ」

新藤が数カ月前の日付のスポーツ誌を取り出して広げた。

『消えた閃光 世界を期待された鍛冶千光選手が消息を絶つて一年』

「あのタイトルマッチの興業を請け負つたのは、うちの傘下の会社だ。俺もリングサイドで観ていたんだ。ここでお前の顔を見てすぐに気付かなかったのは迂闊うがただった」

「私は整備士として生きて行くつもりでしたので」

「うむ、お前がボクシングに何の未練もないのは、仕事ぶりを見ていて良く分かった。人が何かを手にするためには、何かを失わねばならない。言い古された言葉だが、お前は全て投げ打つてでも探し出したい人が居るといふ。大した決意だな。それも足立から聞いた。あいつも後悔している。許してやってくれないか」

「足立会長には、どんなに言葉を重ねても足りないほどの恩があります。それを土足で踏みにじるような真似をして去つた私に、許すも許さないありません。もし、お逢いになることがあれば、そうお伝え下さい」

うんうんといった様子で、この日初めて見せる笑顔で頷いた新藤だったが、すぐに険しい顔に戻つた。

「横井」

「はっ」

「鍛冶が使っていたライトバン、あれは賤別せんべつにくれてやれ」

「よろしいのですか？　ここを潰すとなると、書類上の手続きが面倒になります」

「だったら、早急にやれ。一週間もあれば間に合うだろう」

横井にそう言つと、再び鍛冶に顔を向ける。

「もう行け、お前はよく会社に尽くしてくれた。こいつ等とは違つてな」

顎を振つて擲揄やゆされた従業員達が渋面を作った。

「ありがとうございます」

二つに体を折つて礼を述べる。語られる場所によっては悪の権化のように評される新藤の意外な配慮に、胸にこみあげてくるものを感じていた。

「達者でな」

礼を戻すと、声を発せず口だけをそう動かす岸田が目に入った。もう一度頭を下げてロッカールームへの扉へ向つた。

九

こんな所にもアウトドアブームが押し寄せているのだな　日本一の広さを持つといわれる湖の畔に、流行りのログハウスが所狭しと建てられていた。材料らしき丸太がクレーンで次々と吊り上げられては、積み重ねられてゆく。鍛冶は古いライトバンを停めて眺めていた。

道中の山間や清流の畔ほとりはもちろん、巷ちまたの好景気に踊らされてか、住宅街にまで見かけるようになっていたログハウスだった。

自家用車を手にして以来、美穂子の実家に似た山間やまあいを地図で調べ足は運ぶようになっていた。大きな湖のあることは知っていたが、平安府との県境が山々に囲まれた場所だったことは、ここへ来て初めて知った鍛冶だった。

「美穂子じゃない？　って声を掛けたら、逃げるように走っていったの。髪は短くしていたけど彼女に間違いないわ。遊びに来ていた様子でもなかったみたいよ。もしかしたら、あの辺りでのどこかで働いてるのかも知れない」

彼女の元同僚からの情報であつた。ジェットスキーに乗せてやると男友達に誘われて来たこの湖で、買い物に寄ったスーパーで見かけたという。

美穂子に似た女性を見た。そういった情報を頼りにあちこちへと足を運んだが、彼女の痕跡すら見つけれない日々が続いていた。また、無駄足になるのかも知れない。しかし、見かけたのが駅や観光地ではなく、旅装ではなかったという言葉に一縷いっしゆの望みを賭けた。美穂子が部屋を出てから既に二年の歳月が流れようとしていた。散りかけた桜並木が春の終わりを告げようとしている。

例のスーパーはあそこか　広げた手書きの地図を畳んでポケットに入れ、車に向かって歩きだそうとした鍛冶の背中に声がかかる。

「鍛冶……鍛冶じゃないのか？」

この辺りに知り合いは居ないはずだが 当惑を顔に浮かべゆつくり振り返ると白いヘルメットを被った作業着姿の男が歩み寄ってくる場所だった。

「やはり、鍛冶か。俺だよ、大山だ」

ヘルメットをとった男は、高校ボクシング部OBの大山康之だった。日に焼けた顔は懐かしい笑みを湛^{たた}える。高校時代はウェルター級の国体チャンピオンだった彼の体格は、今やクルーザー級のウェイトをゆうに超えていそうだ。プロボクサー時代の鍛冶の後援会長を務めてくれていた大山は、試合の毎に私設応援団を組織しては、立派な横断幕と共に応援に駆け付けてくれていた。

「大山さんでしたか、こんな所で何をなさってるんですか？」

警戒を解いた鍛冶が口元を緩める。

「それは、俺の台詞だよ。ぷいとリングを去ったかと思ったら、足立さんのところも辞めて消息不明だったというじゃないか。お前こそ、ここで何をしているんだ」

言われてみればその通りだな。足立から話を聞いているとすれば、その場しのぎの嘘も通用しまい。鍛冶は正直なところを述べる。

「人探しです」

「ああ、そんな話も聞いた気がするな。しかし……いや、言うまい。人生はボクシングだけではないからな」

遠い目をした大山が、ボクシングの話を持ちだそうとしたのは明らかだったが、先を続けなかったのは、足立からある程度の事情を聞いていたのだろう。

「ええ。で、大山さんは何を？」

「アレだよ」

彼が手を伸ばした先は、先ほどのログハウス建設現場であった。

「俺が住宅照明の会社をやっていたのは、知っていただろう？」

ひよんな縁で、こつちをやらないかと話を持ってきたのがいてな。いやあ、忙しくてたまらん。ここの現場が終わったら休みなしでま

た鵜飼県のキャンプ場に行かねばならない。人出は幾らあっても足りんよ」

「そうでしたか、盛況で何よりです」

「いつまでここに居るんだ？ 仕事が終わったら一杯 おっと、お前は飲まなかったな。じゃあ、飯でも一緒にどうだ。暫く居るのなら、うちの宿舎を貸してやってもいいぞ」

二階建てのプレハブが立ち並ぶ一角を顎で示す。

「はあ」

意志の見えにくい相槌で即答を留保しながら考えた。手掛かりが見つからなければ、再び群馬の実家を訪ねてみようと思っていたが、蓄えも寂しくなってきた。数日居座ってみようか。美穂子がこの辺りで職を見つけているのなら、その価値はある。宿代を浮かせるなら大山の好意に甘えよう。いずれにせよ、食事ぐらいは付き合っって不義理を詫びるべきだろう。

「材料が全部届いてない今日は、早仕舞いの予定だ。現場に居る戻ったら声を掛けてくれ」

「分かりました」

会釈して身を翻すと 그레이のライトバンに乗り込んだ。

「すみません、この女性をご存知ないでしょうか。この店で見かけという者がいるのですが」

客足が途切れたのを見計らって、レジの小柄な中年女性に訪ねた。僅かばかりの品物を入れた買い物籠を下げ、何度もレジに近づいてはまた離れるといった鍛冶に気付いていた彼女は、露骨に不審そうな表情で言った。

「警察の人？ じゃないわよね」

変な嘘をついたり隠しだてをすることが善意の口まで閉ざしてしまふものだ。情報をもらえないでも困る。正直に素状を明かした。

「私の婚約者です。御不審にお思いでしょうか、怪しい者ではありません」

「ふうん　あつ、ねえ山中さん。この人、よく見る人よね」

写真を手にとった彼女が目を見開いて、隣のレジを担当するやはり中年の女性に手を伸ばして写真を見せる。鍛冶の心拍数が跳ね上がった。美穂子を探しに来たのには違いなかったが、二年間探し続けた彼女の消息が、何の関わりもなく思えたこの土地で見つかるといった期待は大きくなかった。過剰な期待はそれ以上の落胆を生む。この二年間で、それを嫌というほど味わってきていた。

「本当ですか？　今日は来ましたか？　どこに住んでいるのですよう？」

「二日か三日に一度ぐらい来てると思うわね。感じのいい人よ。でも、子供連れだったりするわよ。あんた本当に婚約者なの？」

女性は性急に質問を浴びせる鍛冶に質問で返してきた。子供連れ？　どういうことだろう。美穂子の子供であるはずはないのだが。

「違いわよ小川さん、あれは私設の子よ」

山中と呼ばれた隣のレジの女性が思い違いを正す。

「ああ、じゃあ若鮎ホームの……」

「その若鮎ホームは、どこにあるのでしょうか。教えて下さい、お願いします」

「裏手の山の中腹よ、なかいたる中至って信号のところに看板が出てるわ」
「ありがとうございます」

レジ袋に詰め込まれた商品をカウンターに残したまま店を駆け出した。やっと見つけたぞ。施設　ホーム　児童養護施設か、子供好きだった美穂子だ。子供と接する仕事を選ぶだろうことに何故気付かなかったのだろう。感情の昂たかぶりや、思い込みが冷静な判断力を鈍らせることを覚えておかねばな。いや、美穂子が見つければこんな探偵ごつことはおさらば出来る。どこかでまた自動車の整備士として雇ってもらおう。この景気のよい世の中だ、整備士に拘ることもない。

様々な思いが頭の中を駆け巡る。朽くちかけた看板に書かれた文字を見つけ大きく左にハンドルを切った。

十

未舗装のつづれ折りを昇り詰めると視界が開け、古びた鉄筋コンクリート製の建物が目に入ってきた。スーパーの女性が言った通り、山の中腹付近ちゅうふくふきんに位置するようだが、そこから山頂への道は整備されていない。

恐らく、企業の保養施設を再利用しているのだろう。それらしき文字は薄れ、若鮎ホームと上書きされたプレートが、門柱に貼り付けられている。

十数台は置けそうな駐車場に止まっている車は軽トラックと、鍛冶の乗ったライトバンより古ぼけて見えるものとの二台。それでも遠慮がちに一番端を選んで車を停めた。

ここか…… 駐車場から左手を見上げると小高くなった場所に手作りであろうと思われる遊具が見える。フェンスに囲まれたそこが運動場なのであろう。子供達の黄色い声が上がっているが、その姿までは見えない。

「ごめんください」

玄関から呼んでみるが応答はない。受付らしき窓口も無人で周囲に職員の影も見当たらず、建物に侵入するのは憚はばられた。仕方なく、子供の声がした方へと向かう。見上げる建物は所々塗装が剥げ落ち、山間ではあったがエアコンの室外機も見当たらない。この程度の標高にあつては、今の時期はともかく夏は辛いのではないだろうか。開け放たれた窓を眺め、そう感じた。そして、近づくフェンスにもかなりの老朽化が見られる。錆が出ては何度も塗り直したのだろう。ペンキが足りなかったのか、錆止めの色のまま放置されている箇所もある。四、五歳ぐらいだろうか。その向こう側で数人の子供達が遊具にぶら下がったり、走り回ったりしていた。彼等を見守る女性の横顔に息を呑み、鍛冶の足が止まる。

美穂子……

元同僚が言ったように、肩まであった髪は短くカットされている。ジャージにエプロンといった幼稚園の教諭が保母かといった出で立ちが板に付いてはいたが、見紛うはずのない美穂子の姿がそこにあった。

かけるべき言葉が見つからず、足は根が生えたように動かない。立ち尽くす鍛冶の姿を幼い子供達が目に留め、美穂子の袖を引っ張った。

「ミホ先生、お客さん」

カズ君……子供達に向けた笑顔のまま振り向いた美穂子の表情が凍りつく。鍛冶の姿を目に留めた美穂子の唇が、そう動いたように見えた。

鍛冶の居る場所とは反対方向へ駆けだそうとした美穂子だったが、バランスを失って前のめりに倒れ手を突く。その様子を目にするに至り、鍛冶は呪縛が解けたように体の自由を取り戻した。駆け寄って手を差し伸べる。

「二年間も探したんだ。頼むからもう逃げないでくれ」

しゃがんだまま両手で顔を覆って泣きだす美穂子に、子供達のうちの一人が寄り添い、があと、だあとつかない声を上げ、彼女を庇うかのように手を広げた。見上げる少女の瞳には敵愾心ともいえる光が宿されている。

「ごめんよ、私はその人をいじめるつもりはないんだ。少し話がしたくってね」

鍛冶の声に顔から手を離れた美穂子が少女の手を握った。手についた土が涙で濡れた頬をベージュに染めていた。

「恵理ちゃん、大丈夫よ。先生、転んじやつたから痛くて泣いてるだけなの。怖い人じゃないから」

「足……まだ、良くなつてないのかい？」

「普段の生活には問題ないの。でも、急に動作はまだ……ね」

まだ、か……あれから二年経っている。ちゃんとリハビリはしたのだろうか。それとも、今が治癒の上限なのだろうか。口にしかけ

た疑問を逡巡^{しゅんじゆん}が嚙^{えんげ}下させる。

「今も言った通りだ。逃げないでくれ。話がしたい」

「……うん」

手を貸して立たせた美穂子が膝と手に付いた土をパンパンと払った。

「ごめんね、すぐ戻るから。シン君がみんなを見ててあげてね」
一番年長に見える少年、それでもせいぜい六歳くらいだろうが。

彼の両肩に手を置いて美穂子にはっこりと微笑む。懐かしいエクボが右頬に浮かんだ。

「うん、僕が一番おにいちやんだから任せといて」

ゆっくり歩き出す美穂子に鍛冶は続いた。運動場を下った辺りで
「ちよつと待ってて」と言うと、狭い通路に向かい通用口らしきドアを開ける。

「すみません。少し外していいでしょうか。知り合いが来たもので」

「安藤先生は 役場へ行っただっけかな。わかりました。私が見ていましょう」

ドアの奥から声が返ってくる。

「申し訳ありません」

「いえいえ、高木先生も休みなしで子供達の面倒を見てもらっているんですから。お友達がいらした時ぐらいゆっくりなさって下さい。誰か訪ねてくるなんて初めてじゃないですか」

髪が真っ白になった温和そうな老人が姿を現す。目の合った鍛冶は軽く会釈を返した。

招き入れられた応接室で、修復が不可能なほど表皮の破れたソファに腰を下ろした。

「ごめんなさい。見ての通り貧乏な施設なの。お茶ぐらいしか淹^いれられないわ」

「構わないでくれ。話がしたい、それだけなんだから」

鍛冶としては、一刻も早く想いの丈を伝えたかった。なかなか目を合わせてくれようとはせず、古びた薬缶を手にして背を向ける美穂子に着座を乞う。

「とは言っただものの、聞きたいことも話したいことも多すぎて、どこから始めればいいのだろう。ここは、養護施設なのかな？ 先生と呼ばれていたね。資格を取ったのかい」

「ううん、とってないわ。ここも……何て呼んだらいいだろう。福祉施設でもあり養護施設でもありね。帰る場所のないあたし達にとつては正に家、ホームよ」

首を振って顔を上げた美穂子と、やっと視線が交わった。深く息を吐いてから美穂子が話し始める。

「ごめんなさい。あんな目に合わせたあたしを少しも責めようとしないカズ君と一緒に暮らすのが辛かったの。でも、飛び出してはみたものの、行く当てはなかった。兄夫婦が継いでいる実家は母も肩身が狭いって言うていたし、帰ることは考えられなかった。だから、諦めなきゃならなかった子供と過ごせる仕事を探したの。でも高卒で何の資格も持たないあたしが働けるところなんかなかった。こつゆう施設ってね、どこも経営は苦しいの。自治体の援助があるから、なんとかやって行けてるだけ。経理も事務処理も養護教諭が兼ねているのが普通なんですって。それでもしつこく職安に通い詰めるあたしの話を聞いてくれたのが院長先生。さっきの方よ。当時名神市にいらした院長先生が、この施設を引き受けるに当たって、経理の経験のあったあたしを事務員として雇ってくださったの。でも、カズ君が見た通り。今や、何でも屋ね」

美穂子がうつすらと笑いかけたが、明るい笑顔ではなかった。

「ここはね、親の居ない子供達、捨てられた子供達、障害を持つ子供達が寄り添って一生懸命に生きようとしているところなの。資格に見合った報酬なんか期待できないから、職員は集まらない。院長先生も苦勞なさっているわ。だから、あたしなんかも必要とされているの」

「リハビリはしなかったのかい」

我ながら的のずれた質問だとは思ったが、言葉を切った美穂子が再び話したすまでの間がもたなかった。

「あの子達を見たでしょう」

先ほどの子供達を思い浮かべる。健康な子もいたが、美穂子を庇った幼女も下肢に少なからず肉体に障害を抱えていたように見えた。

「あたしは普通に歩くことが出来る。あの子達の世話ぐらいなら何の問題もなく動けるわ。自分の事は考えていられなかったの」

それが問い掛けへの返事だった。

「私が君を必要としているとは思わなかったのかい」

「さつきも言ったけど、貧しい私設なの。新聞をとるのも節約したいぐらいよ。カズ君の近況を知りたくて図書館に行ってスポーツ誌を読んだわ。やめちゃったのね、ボクシング　ごめんなさい」

唇を噛みしめて俯いた美穂子が深く頭を下げる。

「答えになっていないよ。美穂子、君は何もわかってない。私がボクシングをしていたのは君との将来を見据えてのことだったんだ。君が居なければ何の意味もない。何度もそう言っただけだ」

「あなたがそう言うってくれても、私が自分自身を許せないんだもの。お願い、私の事は忘れて」

「それじゃあ君は私を忘れられるのか」

顔を上げた美穂子の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちる。

「忘れられっこない。一瞬だって忘れたことなんかないわ」

雄弁でも饒舌でもない鍛冶が、説得に用いる言葉は多くない。私には君が必要で、望むのは二人で暮らせる未来だ。愚直にそれだけを語り続ける。

そして美穂子も、二年もの間、何の相談もせずに出ていった自分を探し続けてくれた鍛冶の求めに応えることができるなら、どれほど幸せだろうと思った。資金稼ぎのため、意にそぐわない仕事もしたという。切々と語る鍛冶の言葉に、子供を産めない体であるといった負い目は薄れつつあった。何度も彼の腕の中に飛び込んで行きたい衝動に駆られたが、その毎に^{たび}子供達の顔が浮かんでは踏みとどまらせる。

「あたしがもし自分を許せる日が来たとしても、たった三人の職員で子供達十一人の面倒を見ている施設を離れる訳には行かないの。障害を持つ子も居るのよ。院長先生は高齢だし、今、外に出ている安藤教諭もご自身の人生を投げ打ってまで施設の運営に尽くしておられるわ。あたしはもう逃げない、行く所もないしね。カズ君の気が済むまで話も聞きます。でも、あたしの決意は変わりません。あなたの事は永遠に愛しています。子供を産むことの出来る健康な女性を見つけて幸せになって下さい」

話は並行性を辿る。鍛冶は悩んだ。今の美穂子にとって、生き甲斐とも言えるホームなのだろう。彼女の意志を無視して連れ去ることは出来ない。アパートで塞ぎ込んでいた美穂子を思い出し迷いは強くなっていた。しかし、彼女の力になりたい。傍に居たいといった想いは、彼の中に強靱な意志をもって居座る。二人はそれぞれの想いに沈み、言葉を失くした。

また来る。そう告げて車に乗り込んだ鍛冶を見送る美穂子の心境は複雑だった。

宿舎の前では、派手なスーツを着た男と大山が何事か話しこんでいる。男が察し出す荷物を受け取ると、大山が財布を取り出して数枚の紙幣を手渡す。近づく鍛冶の姿に気付いた男は紙幣を素早く胸ポケットに押し込み「それじゃあ、安全な工事をな」と、明らかに年長の大山にかけるには相応しくない言葉を残し、鍛冶の傍らを通り過ぎた。名神自動車で見かけた連中と同じ匂いを持った人間だなと推測する。

「おう、戻ったか。こつちも今、終わったところだ。減量の心配もなくなったお前なんだし焼肉でもどうだ。美味しいところがある」

「今のは取引先の人ですか？」

肯定を予測した問い掛けではない。大山の口調が吐き捨てるようになった。

「地回りじまわりだよ、こうやって宿舎を建てると、無事故祈願とか何とか理由をつけては金をせびりに来る。もう何度こんなものを買わされたことか」

そう言うのと、手にした荷物を無造作に足元に放り投げた。

「裏ビデオってヤツだ、観るならやるぞ」

自嘲気味に笑って言葉を繋ぐ。

「買わないきゃ買わないで、あれこれ難癖なんくせをつけては工事の邪魔をする。寄生虫みたいな奴等だよ。で、お前の方はどうだったんだ。訪ね人は見つかったのか？」

「はあ　まあ」

「歯切れの悪い返事だな、ちょっと待っててくれ。うちの技術部長を紹介する。ボクシング部OBではないが、俺達と同じ羽鳥工業卒だ」

大山は建設機械にシートを掛ける作業をしていた作業服の男に声を掛けた。

「白井だ。大人しい男だが、腕は確かだぞ。うちの仕事は安くて早い。大手との入札にも競り負けないのは、こいつの能力に負うところが大きい。特殊なプレカットを用いたセオリー無視の工法は他

社には絶対真似出来ん」

そう言つと、地回りとの不愉快な取引の事実を掻き消すかのよう
に豪放に笑つた。

ワイヤーフレームの眼鏡をかけた男が照れ臭そうな笑顔になつた。

「こちらの現場には、いつまで居られるんですか」

ある考えが頭に浮かんだ鍛冶が、せわしく網の上の肉を裏返す
大山に訊ねる。

「手っ取り早く終わらせて次へ行きたいのは山々だが、手抜き工
事は出来ん。この商売は信用第一だからな。もう、二月はかか^{ふたつき}るん
じゃないか」

そう言つと、大きく喉を動かしながらジョッキのビールを流し込
んだ。

「人出が足りないとおっしゃってましたね。私を使つていただけ
ませんかしょうか」

意外な申し出にビールが気管にでも入つたのか大山がむせた。

「そりゃあ、気心の知れたお前が働いてくれるのなら願つたり叶
つたりではあるが……どうやら、ここに居たい事情が出来たようだ
な。肘はもう大丈夫なのか？　うちは力仕事だぞ」

「ええ、もうすつかり」

心細くなつた蓄えを心配せず、美穂子の近くに居ることができ
時間をかけて、二人の納得出来る折衝案^{せつしょうあん}を見つけ出そう。今は何も
思いつかなくとも。

「輸入商品だからといって、マニュアルを盲信もっしんしてしまう融通ゆうずうの効かなさがいけないんです。そして、ここ。こんなものは、材料を積み上げて行く前に切り込んでおけば相当の時短に繋がるんだ。どうして他の業者は気付かないんでしょうね。僕は不思議で仕方ない」

一つ年下の白井であったが、教えを乞うのに歳上も何もない。大山の会社に雇われるに当たり、住民票登録のない鍛冶は美穂子に頼んで、建築関連の書籍を町立図書館で借り出してもらい読み漁った。しかし、白井の理論は書籍に書かれたどれをも凌駕りょうがするものだった。彼の柔軟な思考は、現役時代の鍛冶のボクシングスタイルとも相通あいつうずるところがある。美穂子との話し合いに進展を見ることは出来ていなかったが、世話になる以上は全力を尽くす。それが鍛冶の仕事に対する姿勢であった。

「凄いな、白井さんは」

休憩中も昼休みも時間を惜しんで指導を仰いだ。言われた通りに材料を運び、積み上げ、言われた通りに漆喰しっくいを塗る。そんな仕事をするつもりはなかった。作業の効率を考えるなら、建築に対する理解も深めなければいけない。それが、いきなり雇ってくれといった鍛冶を快く受け入れてくれた大山に対する感謝であり、素人の自分に労を惜しむことなく建築理論を解いてくれる白井への礼儀であった。

「？さん？は、やめて下さいよ。上下関係の厳しい羽鳥工業高校時代なら、鍛冶さんは怖い怖い先輩になるんですから」

「社会に出てしまえば、そんなものは関係ありません。プライドも見栄も生きて行く上において、邪魔なものばかりです。こうして素人の私に企業秘密まで明かしていただけるんですから、敬称は当たり前のことです」

頭を掻きながら、白井が恐縮する。

「まいったなあ。実は、これ企業秘密でもなんでもないんですよ。大山社長に拾ってもらう前に、この理論を手土産に香取建設に売り込みに行ったことがありますね。あそこの連中は、よく読もうともせず、机上の空論だ。そんなものが通用するほど建築業界は甘くないと、鼻で笑ってくれましたよ。で、今や、その香取建設がこの大山建設に何度も入札で後塵を拝しているという訳です。この数カ月、僕に頭を下げ、来てくれないかと言ってきてますがね。死んでも行くもんかって断ってやりました。そうしたら、今度はデベロッパーに頼みこんで、客のふりをして技術を盗みにきました。見せてやりましたよ、堂々と。あのまま真似をしたら一年ともたずに建物は傾いてしまうでしょうけどね」

そう言うのと、白井は気持よさそうに笑う。

「この工法の理論が分かっているのは、僕と主任の桜井だけです。基本的にはフラクタル理論の応用なんです、その根本が分かっているいと建築確認のための構造計算は出来ません。大山社長にも何度か説明したんですが、頭が痛くなるからもういい、と言っておられました」

「機械科卒の私にも、理解は無理でしょうね」

「理解はともかく、その学ぼうとする姿勢と手先の器用さは賞賛に値しますよ。ボクサーでなく、最初から建築を志していれば立派なエンジニアになれたんじゃないですか」

「からかわないでください。何をやっても中途半端な男なんですから」

建物が完成に近づく、と、施主が現場を覗きにやってくるようになる。その度毎の中断には辟易したが、お客あつての商売であった。やむなく、手を止めて臨時の休憩にする。遅れた分は残業で補っていることなど、客にとってはお構いなしなのだろう。

見学に来る家族は、どの父親も判を押したように口髭をたくわえ、妻や子には揃いのヨットパー力を着せ、私は家族を大切にしていま

すといったアピールに余念がない。

ファッションだけの自然回帰派しぜんかいきはが街の生活に戻れば、エアコンにテレビにと大量の電力を消費し、多くの廃棄物を生みだすことだろう。そもそも、湖の中に排気ガスをまき散らすプレジャーボートやジェットスキーが、自然を大切にしようとする者のやることだとは思えない。

無用に大きなサイズのRV車を乗り回し、フロント回りに配されたステンレス製のパイプは、接触した動物や人間の命をいとも簡単に奪ってしまう。たかだか数百万の車のダメージが命より大切だとも言うのだろうか。それに気づいてないのなら、彼等の愚かさに呆れるばかりだ。

工事が終わりに近づいても、美穂子との折衝案は見つけられぬままだった。しかし、鍛冶の休暇で、美穂子の手の空いた時間という限られた逢瀬おつせではあったが、二人には、それがなくてはならない一ひと時ときとなっていた。

子供達に囲まれた美穂子はよく笑ってくれたし、その笑顔を見るだけで鍛冶は幸福に包まれた。ここを離れたくない。全てのログハウスが完成しても、私は残ろう。付近で仕事を見つけ、空いた時間は学園の手伝いをさせてもらおう。狭い運動場ではしゃぐ子供達を見守る美穂子を眺めながら、想いを強くする鍛冶だった。

怒声らしき男の声と、何かが倒れるような大きな音が建物から響いた。驚いた子供の一人が泣き声を上げる。

「何だろう」

鍛冶にも馴れてきた子供達だった。大丈夫、怖くないからねと、走り寄る彼等に目線を合わせるように、しゃがみこんで背中を軽く叩く。

「きつとまた開発業者だわ。ここを別荘地にするから売れって言ってきたの。ごめんね、ちよつと見てくる」

「そんな連中が来ているのか、私も行こうか」

何かを言いかけて、首を振った美穂子が速足で通用口に向かった。

「おっと、手が滑っちまったぜ。じいさん、怪我はないか？」

通用口のすぐ右手、院長室と札のかかった部屋のドアを美穂子が開ける。なぎ倒されたスチール製のロッカーを起こそうとしていた安藤教諭の目には怯えの色があった。中年女性の彼女一人の力で起こせるものではない。冷笑を浮かべる男を、きつと睨みつけ安藤教諭に手を貸した。

「ここを離れて、私達にどこへ行けと言うのかね。ここはあの子達の家なんだ。あなた方は金もつけしか頭にないのか」

普段、温和な笑みを絶やすことのない院長が険しい表情になっている。

「そんなことは、私達の知ったことではない。施設なんか、どこにでもあるだろうが。さつさとガキどもを振り分けて出て行けばいい。経営にも苦労しているんだろう。首を縦に振るだけで、大金が転がり込むんだぞ。そのねえちゃんにも、もつといい服を着せてやれる。まだ、二十歳そこそこじゃないのか？ 可哀想に、そんな地味な格好をさせられて。それに、こんな薄汚い建物があると、ここいら一体の景観を損なう。金もつけじゃない。我々は地域全体のことを考えているんだ」

高級そうな仕立ての背広に身を包んだ男がソファに深く腰掛け、組んだ足をゆらゆらと揺らす。

「大きなお世話です。院長先生は売らないといってるんです。帰って下さい。子供達が怯えているじゃないですか」

美穂子の激しい声が耳に届き、鍛冶が腰を上げた。

「慎君、恵理ちゃん達を頼むよ。私も行ってくる」

「うん、先生達を守ってあげて。お兄ちゃん強いんだもんね」

得意ではなかったが、子供達を落ち着かせようと精一杯の笑顔を作って頷く。最近、ようやく心を開くようになってくれた孝という幼児も不安げな目で鍛冶を見上げていた。

「なんだと、このアマ」

部屋に飛び込んだ鍛冶が、美穂子に詰め寄ろうとした男との間に体を割り込ませる。

「何事ですか、これは」

「誰だ、てめえは」

乱暴な口調の男には見覚えがあった。スーツの色こそ違っていたが、変わらず派手で悪趣味な物を身に着けている。いつか、大山から金をせびっていた地回りのヤクザに違いない。

「職員の友人です」

「てめえには関係のない話だ。部外者はすっこんでろ」

「そうは行きません。女性とお年寄りしか居ない所で乱暴を働くのを見過ごす訳には行かない。警察を呼びましょうか」

「乱暴？ 俺達はいいつ等に指一本触れちゃいねえんだぜ。言いがかりをつけようつてのか」

最近、新聞でよく目にするようになった地上げ屋というヤツか。となると、座っているのは開発業者なのか。さっと見回してソファに座った顔を記憶に焼き付ける。

「そいつの言う通りだ。誰も怪我しちやあいないだろう。血の気の多いのが、少し先走っただけだ。工藤、お前はそれに蹴つまづいて倒しちまっただけだよな」

せせら笑いでそう囁く。この男も堅気ではないな。口ぶりから察するに、工藤と呼んだ男に兄貴分か親分なのだろう。牛のような体軀をした五十がらみのその男は太い金色のチェーンを首に巻いていた。

「とんだ邪魔が入ったようだ。言いがかりで警察を呼ばれてもかなわない。出直しましょう、原社長。土地は逃げては行かないんだから」

「そうしますか 考えておいて下さいよ、院長先生」

原と呼ばれた中年の男が腰を上げたながら、似合わない長髪の前

髪を氣障^{きおき}にかき分ける。机の上に置かれた名刺には、新港開発社長との肩書きがあつた。

「新港開発か、訊いた事がある。地元のヤクザと組んで、あちこの地上げをしているそうだ。こんな辺鄙な土地でも別荘地としてならバカみたいな値段で買うのが居る。まあ、そのお陰で我々の仕事も繁盛しているんだがな。そうか、あいつも一緒だったのか」

腕を組んだ大山が、深く椅子に背を預ける。

「ええ」

「で、どうするつもりだ？　いくらお前が元東洋太平洋チャンピオンでも拳銃やポン刀を持った連中を相手にしてちゃあ、命は幾らあっても足りんぞ」

「そんなつもりはありません。しかし、あのままでは、いつか怪我人が出ます。連中はわざわざダンプを乗りつけては駐車場で方向転換したり、夜のうちに門の外に土砂を積み上げていったりの嫌がらせを繰り返しているんです。土砂の山には私も気付いて、ホームの人達に聞いてみたのですが、私を巻き込みたくないと思ったのでしよう。施設の改修のためだという返事でした。先ほどようやく本当のことを語ってくれました。子供達は怯えきっています。それで、大山社長のお知恵を拝借出来ないかと思って相談した次第です」

「警察には行っていないのか？」

「警察も役場も、その程度では取り締まれないと言ったそうです。奴等も心得たもので、犯罪すれすれの所で手を引かせているようです。しかし、法を逸脱いつだつせずとも、許し難い行為は存在します。弱者は泣き寝入りしろと言うことなんでしょうか」

ふうむと、唸って腕を組んだ大山が、険しい表情で語る。

「毒は毒を以て制すという言葉がある。聞いたところじゃ、あの地回りは金州会っていつて、坂口組の末端組織だそうだ。上部組織に知り合いでも居れば話は早いんだが、生憎、俺はあちらの世界とは縁を切っている、奴等が勇み足で建物でも壊してつてくれれば訴

えようもあるんだがな」

坂口組か 困ったことがあったら言ってこいといった岸田の顔が浮かんだ。

「新港開発はデベロッパとは名ばかりの不動産ブローカーらしい。ヤクザを使って安く買い叩いた土地を別のデベロッパに売り、その利鞘しやうで食っているそうだ。利鞘しやうと言えどモノがモノだからな。バカにはならん金額だ。だからこそ、金州会も尻尾を振っているんだろうがな」

彼の読みは、鍛冶が想像したところと大きくかけ離れてはいなかった。怪我人が出るまで、手をこまねいている訳にも行かないが、岸田に頼み事をするのも気が引ける。大山の言う通り、連中の勇み足を待つしかないのだろうか。思案に暮れる鍛冶に、現場主任の桜井が美穂子からの電話を告げにきた。

「カズ君、お願い。すぐにホームに来て。恵理ちゃんがダンプから撒かれた砂利の下敷きになったの。ホームの車は、その砂利で外へ出られないし、救急車は事故で出払ってて四十分はかかるって言われたわ。砂利を飲み込んでいる様子で、すぐにでも病院へ」

「すぐ行く」

鍛冶の車で病院に運んで欲しい旨を理解すると、受話器を置いて車のキーを掴む。

「案じていたことが起きてしまいました。子供が怪我をしたそうです。出掛けます」

「おい、救急病院がどこにあるのか知っているのか」

大山の声に我に返ると、ドアノブを握ったまま首を振る。

「俺も行こう。桜井、ここを頼むぞ」

幸い、恵理の飲み込んだ砂利は少量で、全ては吐き出せなかったものの、命に別条はないと言う。看護士にあやされて楽しそうに笑う恵理の横顔を見て、胸を撫で下ろすと同時に激しい怒りが鍛冶の内に沸き起こった。

「奴等の事務所はどこにあるんだ？」

「知らないわ、いつもあっちが勝手に来るだけだし……あ、この間の名刺に新港開発の住所は書いてあったかも知れない」

「待て、鍛冶。お前、俺の話聞いてなかったのか。相手はヤクザだぞ。平気で刃物を振り回す連中だ。お前一人が行ってどうなるもんじゃない。いつもの冷静さを取り戻せ」

大山の言葉から鍛冶の意図を感じ取った美穂子も、慌てて彼の袖を握りしめた。

「だめよ、行っちゃあ。事情聴取に来た警察にも話はしたわ。今度こそ、何とか手を打ってくれるはずよ」

そう言う、美穂子だったが表情は冴えない。

「警察は何と？」

「ホームの管理はどうだったのかって聞かれた。あの通りの子でしょ？ その恵理ちゃんから目を離れた私達にも責任はあるって。新港開発には確認してみるが、ダンプのナンバーでも覚えていないとなると、知らないと言われたら……」

言い淀む美穂子だったが、悔しそうに噛みしめた唇を緩めると、こう続けた。

「手の打ちようがないって言ってた。直接、ダンプと接触した訳でもないし、怪我也大したことはないのだろうって」

専門用語で言うところの軽度精神遅滞児である恵理がナンバーなど覚えているはずがないではないか。何とかしなければ 鍛冶の中で切迫した想いだけが膨らんでゆく。

「いつだって、連中の腰は重いもんだ。ひよつとすると原に鼻薬でも嗅がされているのかも知れんな。その子も眠ったようだ。宿舎へ帰って善後策を考えよう」

大山自身、会社を軌道に乗せるため、様々な軋轢に苦勞をしたという。作業中によく聞かされた権力の構造が鍛冶の脳裏に蘇る。ヒエラルキーの上方に位置する連中に富みと幸せがもたらされる以上、不平等はなくならないと。

「君はどうする？」

「容態の急変でもない限り、明日には帰っていいって言われてるの。朝までついてるわ。お願い、軽はずみな真似だけはしないでね」

「しないよ。また電話をしてくれ。迎えに来る」

大山に促され病室を後にする鍛冶の顔には、ある決意があつた。

「条件があるそうだ。お前は手を引いてそこから去れ。組織の大小の違いはあれ、俺達はメンツで生きているようなもんだ。たった一人の堅気の衆にシノギを潰され、はい、そうですかと、すぐ引き下がる訳には行かんのだよ。俺が責任を持ってホームには手出しさせないようにする。あの女性が居るんだな」

「お分かりになりますか」

「そうでもなきや、俺に頼みごとをしてくるお前ではないだろう。何も永遠に逢うなつて訳じゃない。そのうちに金州会の連中も、忘れるさ。暫くの間、姿を見せないようにしろ。それが守れなきや俺にも奴等を抑えておく約束は出来ん」

「分かりました。こんな私のために面倒をお掛けします。いつかお役に立てる機会があれば声をお掛け下さい。私に出来ることなど、たかが知れているでしょうが」

「気にするな。お前はこちらの世界に住める人間ではない。損得なしで付き合える友人のために力を貸すだけだ。忘れずに居てくれて嬉しかったぞ、元気でな」

「ありがとうございます」

姿は見えずとも、電話の向こうの岸田に深く頭を下げる鍛冶だった。

工事も完成し、宿舍の撤去が行われる中、鍛冶は若鮎ホームの院長室に居た。

「ホームの無事を約束してもらいました。二度と、連中が現れることはないでしょう」

「何とお礼を申し上げばよいのやら。しかし、一体、どんな方法で……」

当然の質問だったが、ただ黙って首を振るばかりの鍛冶の様子から、口に出来ない事情を院長は察した。

「とにかく、これで子供達も安心して過ごせます。ありがとうございます」

「院長先生に美穂子を拾っていただかなければ、こうして逢うことが出来たかどうかすら分からないのです。私に出来る精一杯のお礼です。どうか、お気になさらず」

「安藤先生や子供達にも教えてあげよう。一時間ほど外します。高木先生、宜しく頼みますよ」

うんうんといったように頷いて院長は席を立った。気を利かせてくれたのであろう。

「その条件を受け入れる約束だ。しばらくは逢えない」

「カズ君……」

ここを離れることはできないと言った美穂子だったが、鍛冶が訪ねてくれるホームの暮らしに幸せを見出し、これが永遠に続いて欲しいと願う気持は彼と同じだった。胸が潰されそうな想いで言葉が詰まる。

「頼みがあるんだ。君が、うんといってくれないと私はここを去れない。脅迫といってもいい」

口にした言葉とは裏腹に穏やかな表情でそう告げると、茶色の枠線が入ったA3サイズ用の紙を茶封筒から取り出す。【夫になる人欄と、【証人】欄は、すでに書き込まれている。婚姻届だった。

「恩のある人にこう言われたことがある。人が何かを手にするためには何かを捨てねばならないとね。だが、君は私の全てなんだ。君を失う訳には行かない。結婚してくれないか」

思ってもみなかった提案に、落としていた視線を上げる。そこには、にこやかに笑いかける鍛冶の顔があった。

「情けない話だが、最後に務めた会社を辞めて以来、私は住民登録をしていない。君の住所地であるここですら受け付けてくれるそうだ。離れていても一緒に居ると感じられる。それに、今はまだ見習いの身分でね。給料も安い。子供達がここを巣立って君を迎えに来れるようになるまでには一人前になっておくよ。どうだろう、こんな甲斐性かいしょうのない私では、君の夫として失格かな」

美穂子は鍛冶の胸に顔を預け、涙にむせびながら何度も首を振った。

十四

月に一度、いや、せめてふた月に一度でもいい。ホームを訪ねることが出来ればいいのだが

美穂子と離れることは勿論、ようやく馴れてきた子供達との別れも辛く感じられた。きれいに片づけられた現場を防波堤に立って感慨深げに眺める鍛冶に近づいてくる人影があつた。誰かまだ残っていたのだろうか？ 目を凝らし社員の面影と照らし合わせようとするのだが、誰とも重なることはない。金州会の工藤だつた。身軽な動作で、防波堤に上がる。

「とんでもねえ手を使ってくれたな。親父は手を引けとよ。だが、俺達は、上の言うことが聞けねえからこの世界に住んでいるんだ。おめえの腕の一本でも持って帰らねえとメンツが立たねえんだよ。破門は覚悟の上だ」

そう簡単には行かなかつたか 会社には姿を見せるなと新藤に言われても、どこ吹く風といった様子で車を洗いに來ていた構成員が居たことを思い出した。

「聞くところによると、おめえはボクサー崩れだそうじゃねえか。おもしれえ、手合わせ願おうか」

背中に隠し持った短刀を抜き出すと鞘を投げ捨てる。水辺の死闘で佐々木小次郎がどうなつたかを知っていれば、できない行為だつたろう。もっとも、対する鍛冶は一振りの刀も手にしていなかったが。

月明かりに照らし出される刃渡り二十センチほどのその短刀は、そのまま工藤のリーチを伸ばすことになる。バントム級だつた鍛冶にとって、五、六階級ほど上の相手と対峙するようなものだ。背を向けて逃げ出すか 那の場合、岸田との約束は守られるのだろうか。彼の迷いを断ち切るかのように、鼻先でナイフが円弧を描く。反射的にスウェイでかわし、効き腕のストレートを繰り出そうとし

た。その瞬間、本能が危険を訴え体を開く。眉間の数ミリ先を、一撃目より大きな円弧でナイフがかすめて行った。

危なかった……スITCHのタイミングが遅ければ、バックハンドの一撃、正に返す刀というヤツだ。その餌食になっていたことだろう。目の端で捉えたナイフの軌道を紙一重で避けると、狙いすました左フックを顎先に叩きつける。大きく首を捻じらせて工藤が膝から崩れ落ちた。意識は一瞬で刈り取られたようだ。

「すまん、顎を砕いたかも知れない。一瞬のことで手加減が出来なかった。病院へ連れて行こう」

陸に上げられたテトラポットに腰を下ろした鍛冶の音がコンクリート製の防波堤に響く。意識を取り戻した工藤は、頭の下に敷かれた薄いクッションに気付いた。

「手加減か……参ったな。この上、そんな情けをかけられちゃあ、ヤクザはやってられねえんだよ。放っておいてくれ」

上半身を起こし、ペツと吐き出した唾は、夜目にもどす黒く濁っていた。

「おお、痛え。しかし、強えな、お前。二の矢を躲したのはお前が初めてだ」

「このことを岸田さんに話すつもりはない。頼む、ホームはそっとしておいてやってくれないか」

「そうか……俺はどっちでもいい。破門覚悟で来たんだからな」
口を開く毎に、顎の痛みに関をしかめる工藤だった。

「恨むなよっていつても無理な話だろうが、俺達はヤクザだ。悪いことをしますって看板を上げ、それを使おうとする連中が居る。それだけのことだ。お前らがあの丸太小屋を建てているのと変わらん。もつとも、これは俺の意地だったかな」

再び唾を吐き出すと、工藤は笑みすら浮かべた。

「しかし、世の中には、善人面で、悪事を働く奴等がたくさん居る。新港開発の原もそうだ。うちが手を引くと言った途端に、他の

組を雇おうとしたくらいだからな」

その言葉に顔をこわばらせた鍛冶に、なだめるように手を振る。

「安心しろ、お前の後ろ盾になった岸田さんは今や本家の若衆頭だ。あの人が手を出すなって言った物件だ。今更、原に手を貸そうとするようなバカは、ここいらにや居やしねえよ」

工藤は幾度も血の混ざった唾を吐き、その毎に顔をしかめながら続ける。

「権力者なんてのは、その最たるものだろうな。気をつけろ、お前の居る建設会社は目立っている。出る釘は打たれるってヤツだ」

「何を教えてくれようとしてるのだ」

「これ以上は話せん、と言いたいところだが、俺みたいな下っ端じゃあ、大したことは知らされてないってのが本当のところだ。お喋りが過ぎたようだな、俺の気が変わらんうちに早く行け」

そう言つと工藤は鍛冶に背を向け、防波堤を北に向かつて歩き出した。

十五

未だ、衰えを見せない好景気のなか、大山建設の業績は右肩上がりの成長を遂げていた。新たな現場となった中ノ原市のキャンプ場に建てられる六棟のログハウスも、大手との競合を退け受注に成功したものだった。

「鉄は熱いうちに打てだ。俺はこの程度で満足はせんぞ。お前らにも、もつといい暮らしをさせてやりたいからな」

クレーン技師や重機を自前で賄うようになれば工事の効率は更に上がり、コストダウンも計れる。引いては、粗利もアップするというものだ。業界において中堅の地位を手にかけていた大山の、他社に対する見栄も含まれていたのだろう。白井の反対を押し切った設備投資は、新参の鍛冶にも性急さを感じさせるものがあつた。また、それを勧めに来た商社マンの卑屈な態度と狡猾こつかつそうな顔にも、不安を覚えていた。

「香取建設は、ここを受注出来るつもりだったらしいからな、相当数の材料がフィンランドから到着すると聞いている。どこかで格安なログハウス村でも建てるつもりかな」

大山が高らかに笑う。会社の発展は生活の安定に繋がり、美穂子との将来を確かなものにしてくれる。建設予定地を見おろす丘陵で澄んだ空気を胸一杯に吸い込む。抱いた不安が取り越し苦勞であつて欲しいと鍛冶は願った。

「まあ、余所そとのことはどうでもいい。これだけの設備投資をしたのだからな。今後もせっせと働いて、まずは借金の返済だ。ところで、まだ材料は届かないのか？ 午前中に搬入される予定だったろう」

「連絡してみます」

この時代、まだ珍しい携帯電話を肩から下げた白井が、小さな画面を覗きこむ。圏外が表示されていた。

「麓^{ふもと}まで、ひとつ走り行ってきます」

現場主任の桜井が、車体側面に大きく？大山建設と書かれたバンに乗り、白いヘルメットを被ったまま車を方向転換させる。まだ営業が始まってないキャンプ場の管理等に電話はない。ここから二kmほどの所にある、小さな商店まで向かうこととなる。

「店のおばちゃんと長話してくるんじゃないぞ」

白井が、からかうように声を掛けた。気のいい桜井は、話し好きな地元のお年寄りの格好の餌食となり易い。「わかってますって」軽い調子で手を振ると車を発進させた。

急ブレーキでバンを止めた桜井が、車から転げ落ちるようにして飛びだしてくる。

「社長、大変です。昨日、荷降ろしをした材料が検疫^{けんえき}に引っ掛かって、倉庫から出せなくなっているようです」

大山の眉が大きく動く。

「輸入木材は検疫の対象外だろうが、なんで、そんなことが起きるんだ」

「何でも、動物の死骸が木材の中から見つかって、国内で使用を認められていない農薬の成分が抽出^{ちゅうしゅつ}されたんだそうです。役人の言葉は、こ難しいばかりで要を得ませんが、大筋でそんなことを聞かされました」

彼等のやり取りを聞く鍛冶の脳裏に、気をつけると言った工藤の言葉が蘇った。あれと何か関係があるんだろうか。ただ、注意を促すにも情報の絶対量は足りず、得意の絶頂に居た大山が、それを素直に聞き入れるとも思えなかったため、口にせずにおいたことが後悔される。

「港へ行ってくる。何かの間違いであってくれればいいのだが……白井、お前も来い」

砂利を蹴立てて、二人を乗せたバンが走り去る。

「鍛冶さん、どうしよう。材料が来ないとなると」

「社長がおっしゃったように何かの間違いかも知れません。ここで我々がおろおろしても何も始まらない。二人の帰りを待ちましよう」

桜井の背を押して、管理棟への坂を下った。

「やられた　今から発注しなおしても材料が届くのは半年後だ。到底、工期に間に合わすことは出来ん」

「どうなさるおつもりですか」

白井の声にも力がない。

「どうもこうもない、香取建設に泣きついて材料を譲ってもらうしかないだろう。さもなきゃ違約金を払って破産だ」

おそらく新港開発の原辺りがうつかり口にしたのを工藤が耳にしたのではないか。「気をつける」競合するどこかに仕組まれたような気がしてならなかった。その考えを、大山に告げる。

「それが香取建設だったとしたら材料も譲ってはくれんだろうな。仕事も取れなかった奴等が、あれほどたくさんの材料を仕入れたことの裏に気付くべきだったんだ。俺としたことが迂闊だったよ」

ふうーっと大きく息を吐く。好事魔多し。順調過ぎた事業が、ひたひたと歩み寄る悪意や謀略に気付かすのを遅らせたのだった。

「香取建設か、それとも他の大手か　いずれにせよ、完全に仕組まれた。今から思えば、設備投資の話を持ってきたのもタイミングが良過ぎる。油断していた」

大山の後悔は続く。

「香取の親会社は大手ゼネコンの大都だ。奴等なら厚生省ぐらい動かすことが出来る。もしかしたら海上で木材に農薬をまき散らしたのかも知れん。いずれにせよ、俺の管理が甘かった」

肩を落とす大山が背中が小さく感じられた。まだ電気の来ていない管理棟だったが仮設の電源は引いてあり、発電機もある。しかし、誰ひとりとして電灯に手を伸ばす者は居なかった。

山々に囲まれたキャンプ場の陽が沈むのは早い。夕暮れ時の物悲

しさだけでない重みが、彼等の頭上にのしかかっていた。

十六

「倒産は免れたが、俺に残ったのは、ここだけだ」

？大山興信所 信用調査全般 企業調査 その他、ご相談下さい？
堅い字体でそう書かれた看板の上がる小さなオフィスで接客用のソファに腰を下ろし、大山は両肘を膝に乗せた。

諦めざるを得なくなった六棟のログハウス建設は、そのまま香取建設が請け負うこととなり莫大な違約金は払わずに済んだ。しかし、設備投資にかけた借金はそのまま残る。処分しようとしたどれだけでも使っていない重機は、いいように買い叩かれ、手元に残った金は僅かだった。

白井以下、多くの社員は現地徴用的に香取建設に拾われることとなり、業績どころか、技術まで根こそぎ奪い取られてしまうことになった大山の落胆は大きい。

「自己破産という手もあったんだが、あいつに頼まれたここまで失う訳には行かなかったんだ」

不慮の事故で亡くなったという友人が経営していた興信所だった。負債を精算して経営権を買い取り、そのままのスタッフで運営させていた。これが大山に残された唯一の財産になる。

俺達の本社は現場だと、社屋さえ持とうとしなかったことから明らかに、男気のある大山らしいと言えらしいのだが、やれ設備費だ何だと金の無心にのみ熱心なスタッフの要求するまま金を与え、会計報告すらさせてない杜撰さずさんを白井がこぼしていたことがあった。

本拠をここに移した途端、会社を食い物にしていたようなスタッフは一人去り二人去りと、空のデスクが目立つ閑散としたオフィスで鍛冶がテーブルを挟んで向き合う。

「お前にも、大きなことを言って期待させた揚句のこのザマだ。すまん、俺に義理立てなどせず、あのまま香取に拾ってもらっても

良かったんだぞ」

安定を望まなかった訳ではない。ただ、それに不義理をしてまで手に入れたと思える価値を見いだせなかっただけだ。幸い、美穂子を迎えにゆくにはまだまだ時間もある。

「いいえ、突然雇ってくれといった私の願いを聞いていただいたばかりか、美穂子の件でも随分とお世話になりました。興信所の業務がどういったものなのかは分かりませんが、私にも人探しの経験があります。お役に立たせて下さい。建築が覚えられた上に、今度は探偵まで出来る。誰にでも出来る経験ではありません。金では買えない私の財産となつてゆくはずです」

「お前は前向きだな。相変わらず何を考えているか、さっぱり分からん無表情だが」

呆れたような声でいう大山だったが、同時に鍛冶の逆境への耐性を強く感じもした。

「調査員向きかも知れませんが」

たった一人残った大谷という初老の調査員が、デスクに座ったまま声を発した。

「一から教えて下さい」

席を立ち、二つに体を折る鍛冶に手を挙げて着座を促しながら、平坦な声で告げた。

「調査員の仕事は地味で、とてつもない忍耐を必要とします。探偵の肩書だけに憧れてここに居た連中は、現実とのギャップを埋めることが出来ずに去って行きました。私は亡くなった片山所長に恩があります。誰一人としてまともな調査員を育てあげられなかった後悔が私をここに留めていたのだと思います。教えましょう、ただし我々の仕事は専ら人の粗探しです。時には依頼主ですら自分に都合の悪い真実に口を閉じます。人間の本性が目を覆いたくなるばかりの醜いものだ、嘆きたくなる日もあるでしょう。覚悟を持っておいってください。若い貴方に耐えられるといいが」

「私には、派手な仕事より似合っているように思います」

「貴方はいいい目をしておられる。最後の御奉公ごほうこうのつもりで、培つちかつた調査術の全てをお伝え出来れば、亡くなった所長への恩返にもなることでしょう」

「宜しく願います」

再び体を二つに折る鍛冶の横顔を、大谷は目を細めて見つめていた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7243v/>

消えた閃光

2011年8月17日12時35分発行